東海道名所圖會

四

和書門
類 八八七六 號
一八七 函
一二 架
六 冊

内閣文庫
和書
類 八八七六 號
六 冊
一七二 函
一二 架

内閣文庫
番號 和 8876
冊數 6 (4)
函號 172 270

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

東海道名所圖會卷之四

目録

穐葉山 佛殿 秋葉權現社 多宝塔 白山祠 天滿宮 鐘樓
一ツ屋 二ツ屋 奥院 二什寶 七瀧
名古葛布 京丸 ○掛川
妊身塚 禪堂 經堂 神庫藏 樣藏升
菊阪 已等麻知神社 ○日坂 佐夜中山 夜泣石 夜鶴松
淡嶽 子育觀音 四郡橋 菊川
敬滿神社 牧原 諏訪原古城 初倉山
名物 染飯 阿波波神社 無間山 觀音堂 半焼 駿遠兩國碑 ○金谷
瀬戸 太井河 ○嶋田
蓮生寺 ○藤枝 田中城
名古盆石 ○岡部 那閑神社 宇津山 葛細道
○丸子 連歌師宗長古蹟 嘯月亭 手紙 手紙阪 京合戦 繁山
古枯森 建穂神社 建穂寺 ○用宗古城

石原田

安部川　弥勒茶屋　○駿府
賤機山　滝間社　糸山　別雷社
清水　名産石陪茶　足久保観音　麻機山
焼津神社　草薙神社（楠大樹　香形鮮）　梶原一門塚
姥ヶ池　有渡濱　久能山　久能寺（什宝）
三保松原　御穂神社　羽衣松　○江尻
瀬名川　庵原　盧岑　角田川
清見関　浄見寺　清見川　清見浦
清見潟　清見禅寺（佛殿　開山堂　足利尊氏像　龍虎二画　客殿書　衝立二画）
（石浮屠二基　清見寺ト景詩）　○興津　甲州身延山道　奥津川
古奴呉濱　岫寺　袖師浦　磐城山
薩埵嶺（足利尊氏直義古戦場）　名産栄螺鮑　豊積神社
○由井　蒲原古城　○蒲原　富士川

四ノ壹

富士川名名　曽我兄弟祝舎　虎御前祝舎
滝間神社　古家川（元度橋）

秋葉山
一鳥居

国立公文書館
National Archives of Japan

稲葉山社

大登山秋葉寺 遠州周知郡坂居村山にあり 禅宗曹洞中興光皆和尚
同周知郡可睡齋に属す 天王年中再建
本堂聖観音 十一面観音 仏安に倶に同作 長三尺許 基大士の作 脇士勝軍地蔵
秋葉山権現社 本堂の側にあり 祭神大己貴命 或云延喜式内小國神社
南山鎮守 秋葉同社に多寶塔 大日如来 仏安
二尺坊 南山護神 秋葉社の側にあり
禅堂 本堂の右にあり 経堂 禅堂の右にあり 白山祠 本堂の右にあり
天満宮 本堂の左の方にあり 鐘楼 経堂の後にあり 神輿蔵 秋葉祠の右にあり
樓閣 本堂より八町許にあり 一名居 坂下村の上にあり
南山の名 泉 額 最勝閣 奉勅沙門八十三翁方面山書 額 金明山領
二鳥居 一名居の上にあり 子安地蔵あり
奥院 本尊不動明王傳教大師作 龍頭山と号す 本堂より北の方
二里許 奥院の山峰 遠国の山峰 女人結界
夫当山は寺院と称し奉る 舊起見へ侍よ云むり 元正天皇御宇吾老
二年に僧正行基諸国巡行の時当山に登り老杉を伐て聖観音を彫刻し
十一面大悲の尊像三軀仏彫刻して国家安民五穀豊饒の為に御院を
若創しよりこの二仏仏安び傳聞行基大士を文殊菩薩の化身と

天竺婆羅門尊者東朝相見の時権者の事を仏に事い南都東大寺の
記傳に鮮し当寺の鎮守は神は延喜式内小國神社と号す 神躰は大己貴
命なれと秋葉権現と称し一山護神は二尺坊と同社と犯る山霊人身
の時は信州の産なり其母は観世音仏信心普門品仏誦する事数百
巻に達し或夜は大悲三十三身の中に迦樓羅身仏現ずるを見て
妊體一臨月に到り徳を満の相ある男子仏誕生父母歓喜び悦ひ
成長に従ひ出家をこしめ熱海国蔵王堂十二坊は中二尺坊に住職を
此時不動三昧の法仏行ひ一七ケ日に八千枚八千度八千度支木を焼く
犯行して満座の暁焼香の火烈々として燃上る鳥形両翼にして
左右に剣索仏持る金相現せり 永行法成就せりとあ仏も一
心に観念を忽煩悩業生死の若患滅尽して飛行自在の神通を
得る然るに一の白狐出現せり 行国を止んん
所に永住して度生利益専に誓ひ虚空仏飛行ゆひ

此秋葉山ハ白狐ニ化して国益ニ成安住の嶺と爲り幸福基大士の安置の大悲の尊像を生せしうば尼を禮拝供養し奉り其所に行基開基来尾二年より九十年に成後ハ 淳和天皇御宇大同四年に弘仁之甚其後弘仁二年より諸国に遊化して普く衆生に利益なんを霊嶽霊窟に飛行し給ふ名山名蹟とめぐりゆく其星霜幾りくて四百六十餘年に成後 伏見院御宇永仁二年八月中旬に本社秋葉山嶺に帰巡わりあくと大登山と称せらる南海の汀より登り攀ぢ登りて山に軸際より又五十町を登る山標相の仏地に到る入路十住十行十回向十地昇進して候ハ登り階級四十二位と候まる社儀と上八町を四方四隅の菩薩文殊 普賢 観音 弥勒 頂上に則八葉の蓮華を表せ仏位と表せる又秋葉寺と称せ

まるの上古此山に水乏しかりしゆへ寺僧歎き祈願の神社へ祈誓ーぬれば二尺坊神勅に蒙りて天龍八部に招請しければ忽應験あり

て霹靂震雷ー一夜の中に西北の隅に清泉涌出せり時の

人歓喜踊躍して水中より又れた潔白の明珠二顆あり是蛟龍領下の寶玉と又蝦蟆生て背面に穂葉の二字に頂き出る因縁寺に秋葉と称ハの龍社玉に今に寺領として寶庫に蔵む蝦蟆に帰水底に入て見えず加之の清泉社に寛永年中山挑出ありて勝と織たれより此水と像織并に其織さる布に青銅十疋に副て住職に賜るまれ又今に寺の寶蔵に横布を住職乃涅槃衣とあり寶に不思議の霊水ゆへ大旱の時雲もれぞ忽膏雨降る是龍神感應の名水と秋葉山略傳記大概かくの水ー古縁起書紀等を享禄天文の間甲州武田信玄ぶ騒擾に羅て兵燹に焼亡に成秋葉神社観音堂縁に遺り寶に品を寺僧携へ逃免ゆへ今に為に甲州乱妨の軍勢堂社に焼掛へんとて教の火に成かれども棟上より白水流れ出て火に成免るまれ応験著ーなれど近年都鄙の来信暑寒を嫌らび

蝶のぬく道ふはとひ秋葉講とて國々より多くは人数と聚れん
月番まゝ宿々れ泊札辻々別札路の標石あるひい石燒燈ゆ建く
常夜と思ひ勧請の祠や京師洛東聖護院村ふ近年経営ありて
紫庭の御行場所とれされを初として江戸大坂其外諸國ふ多く
ゆのしも侍人つとひて振しさ半法莚のわし殊ふ山廿四日月毎の
縁日とそ山竜寺夜参れ御参れ御山度跣足参る埜断寒垢離籠屋々
新端とつゝね山土山下宗店の振ひ坂下村の旗籠戸舎の宿々
みゐ山神の霊験ゆゝべ年毎れ例祭い十一月十日より十六日ふ至ふ
山夜せの時社頭の後ゆる白砂ふ旅て火鎮の神祭あり御神楽御湯
と捧る其時幣い条侍の狩見紙禁び拝れより七十五脇の神供紙
備ふ山時ふ至く山嶺山藤春動る半衡久く続云山神多く
まゝふ参る服ゆ法楽歓喜の者と我参信れ来遠近紙いらゝ山坊ふ
一夜籠り社ふよ敬礼る半稲麻竹葦のわし道中れ振ひ

馬作農れ繁昌影参でんくふゆる山御神の霊験かゝく山中に来一ゆ弓
刀杖の横難を免れ身二ゆい火災焼亡の危ふ紙免れ来二ゆい法水流没
山難紙免れさゆゆ中古兵火の時も軍卒多く換ト其餘煙ゆ社
頭の檜皮ふ一火ふ焦せる時水雲起て多ち消もこれ今ふ遺りて多くう
火伏鎮護の神徳夜生化益の方便海内一条ふ伝聚せとつ半ゆ
三尺坊書物 永仁二年八月十六日 龍王縁起ふ 牛王 社中ふ竜てあつて出さん
駒角 駒王 鹿王 鳥王 不老貝 これい数百載と唐くも中れ肉身の色
秋葉山道法 上方京師より術もゆ東海道御の駅くり山入く八里半
大野川 ゆり吉田豊川の上し大聖の宿と唐く細川巣山ふ至ふ
二遠の岡堰し大平 神沢 熊石 山路ふして東ふ里ふ
ゆ石ゆ村の溪川 ゆく 椎茸紙多く 俗ら山道猿多く それより戸倉
ゆふ山里ふ至ふ風来寺くりゆ山れまで八里半と戸 余くり秋葉山の
社手て又十町の坂路し ○江戸の方くり参ゆる山掛川の宿より
ゆへ入く森の宿へ一の瀬へ至る山人ふれとゆは川ゆ山ゆ歩行
左へ折て 郡く四十八ケ瀬ゆり土 仮橋ゆり 裏ゆ時々法水ゆれを
橋ゆ一 激人ふれふ難む一ノ瀬ふ 子奈良安ゆ至る山間ふ天龍川の上
ゆり舟ゆ一もみれくり大居ふ至る掛川くり秋葉山まで九里半 ゆり

秋景の迫く
石ゐ村もん
溪川小椎林を
ちらく之双べく
椎茸と化ふ
匂ひよく〳〵
此地の名産とな

風朱るゝ
秋景山まで
八里餅みか
山路く其中の
大野といく
而の女ハ旅人
の若の分
脊負て
坂路を
やもらい
ゆうて
世ワうと
するく
洛小夫脊
夫の
婦人ゆや
比せん

七龍風穀うり秋葉山の巡礼の集山村より西南十町許の寺村の山中にあり
龍の高サ百丈ふし七段ふ落る故ふ名
京丸 秋葉山のふもとあり山家ふして一村の名民居ハ僅ふ五軒許其長秋
源左衛門尉と云家ふ平代の金巾子の冠緋縅の鎧錦の直垂弥持ん
古證文稽記一紙を写す 土人云むかし其苗孫と云伝
逆乱ふ襲れし山中ふ隠れし 日坂まで三里北九町驛路鈴ふ攻られし土岐の山家ふ落り其後高城ふ
遠江 掛川 一人駿州武田信玄ふ攻
籠る永禄十二年淡州の軍勢ふ攻高城ふ籠り城外ふ
しく相戦ふ牧弁方近忠次の兵卒園田竹右衛門石川新右衛
左右田ふ落沼之九郎高橋傳九郎松下加右衛門ふ合戦を
寄ふ落沼之九郎高橋傳九郎松下加右衛門ふ合戦を
是非くふ等はよく戦ふよりて月六日今川氏真掛川
の城を抱る事叶ハず適れ出同国懸塚より船ふ乗く
小田原ふ移り行ける是高城と石川日向守ふ賜ふ
それより代々の諸侯遠州ふ守護し給ふ
冨士紀行

おりてさて岐さく徒ふかけ川やいとぬれ袖ふ秋のむら雨 素孝法印

名産葛布 葛布ハ名産ふ際ふ景服の市店ふ出を多い鞠稽ふ用ゆられ
掛川の名産也下坂と云ふ銀治も此城下ふ有り又鉄の波を造る
藤蔭中

さしも此所名ひとり人くふ葛てふ布ハ掛川のそと 為相

已等乃麻知神社 日坂の少し西の方宮村ふ有り今譽田八幡宮と称ス
延喜式内佐野郡ふ属を又一説ふ掛川城下海道
筋の裏町の小社ハいつとも又の大仙寺村撫訪社ハいつとも知れず分明ふ
此所の少し西ふ有り此社迄ふ錦銀山と云ふ
此所川と云ふ

雄錦の山ハ里俗云むかし此神の姫ハ龍宮へ行
と領ひしかども神の龍雄の錦ハ里人と呼んく牛川へ潮を
国んく乃ふよりて碁盤と投ける雄の錦ハ滅しの
歌錦 二ツの山と成りく今ふ有り碁石の歩ると雄くふ
いひ所と投ぜしの所と今ふ剛暗村と云
文徳実録云嘉祥二年七月遠江國事任社
授従五位下
三代実録云貞観二年正月廿七日戊寅授遠江國
真知乃神並正五位上
ことのまくは此神いとくのとくはのことくれんとやいとそれのうんと
ちりふりいとおりくさ
十二月日記 北四日ふるふりうのさくの中山ふ有る事任と申やいふ社のほとも
道いとおりく後くく山ふけ雨そ嵐もあらしふ帰りくるまくふ
遠近ハうはぐ麦さと山ふ似ふんくわくくられ海りとの
里くく川といふ所ふ
家集 神ハけたのうつかも東海道の海ふ有くもとあり久る 相摸
名家 又もまん家孫ハさと社まるかくふ社とみちふ 左明

光行紀行

てのまいさと雪の白髪しら絲おろしまんまに其所まくをまくらとく

いとくらいひつけられしし

ゆふすすけてだたのむしまちのかとの木のもとの神の木ゝ社　光行

奥應海道記

山口といふ今宿に入れば行い旧ふるのいく通ぞり登原に祢ふ一さと

むらとさびしきあはれくるけいが米の伊ゝ社よ来給に年地ぞ

ちゝび仲信のいまくらん薩埵山と申ふ神ゝ社あり

ゆくべしと身もなぐさのふ後身むぐさのふとそのむ一ちいこ倫山よあゝ

ゝも亦しくくのきづくもゆいくん願ひ者ぐ畢竟空寂乃法味に

納受して真實不虚の感應をとられた方へ

ゆとふことのまくにゆの杉たてる神のちうひけまゝ一ゝ名ん

曙記

おとの海くれ原しゝうゝて　光廣々

ゝゝのあり年の伊社面しゝとゝまふゝん

みゝ光ゝ神にまうせて卯ゝまちふつゞあり之のまくにいのん　光廣々

入坂を越むとて六町ばかりゝゝのゝ八幡宮あり花表小掃除ぬ

都に入ゝゝあゝゝいまに見ゝうり一初掃ゝの栄ゝれゝ

たちゝゝふ神社花表初ゝゝゝゝゝれゝゝゝも外ゝゝそゝ　光廣々

あつまゝうゝ表を求ゆれど山ゝゝ花やゝゝゝ不咲のゝゝん

天文四年三月冷泉大納言為久卿東武の記

日坂山口ふいの海ゝ年任といふ社とふ一拜ゝ

大井川ゝふのつゝ橋をゝ一ゝまゝ社ゝゝいのゝ神垣　冷泉為久卿

和漢年代記云　欽明天皇十六年乙未二月大己貴神遠州周智郡

ふ現れ給ふ　年任神社と崇む　周智郡延喜式佐野郡正

新坂或い西坂と記書に金屋まゝ七ゝ里二十九町此所の名物よ

日坂　遠江

蔵餅を製ゝゝ法ゝ

丙辰紀行云

此所の民つゝび餅に麦の粉を混の名飢を救ふゆゝふいふ一ゝ新坂に

ゝゝび餅ゝゝ甚名あるとのゝ或い葛の粉にくゝ蕨餅ゝゝ一ゝの

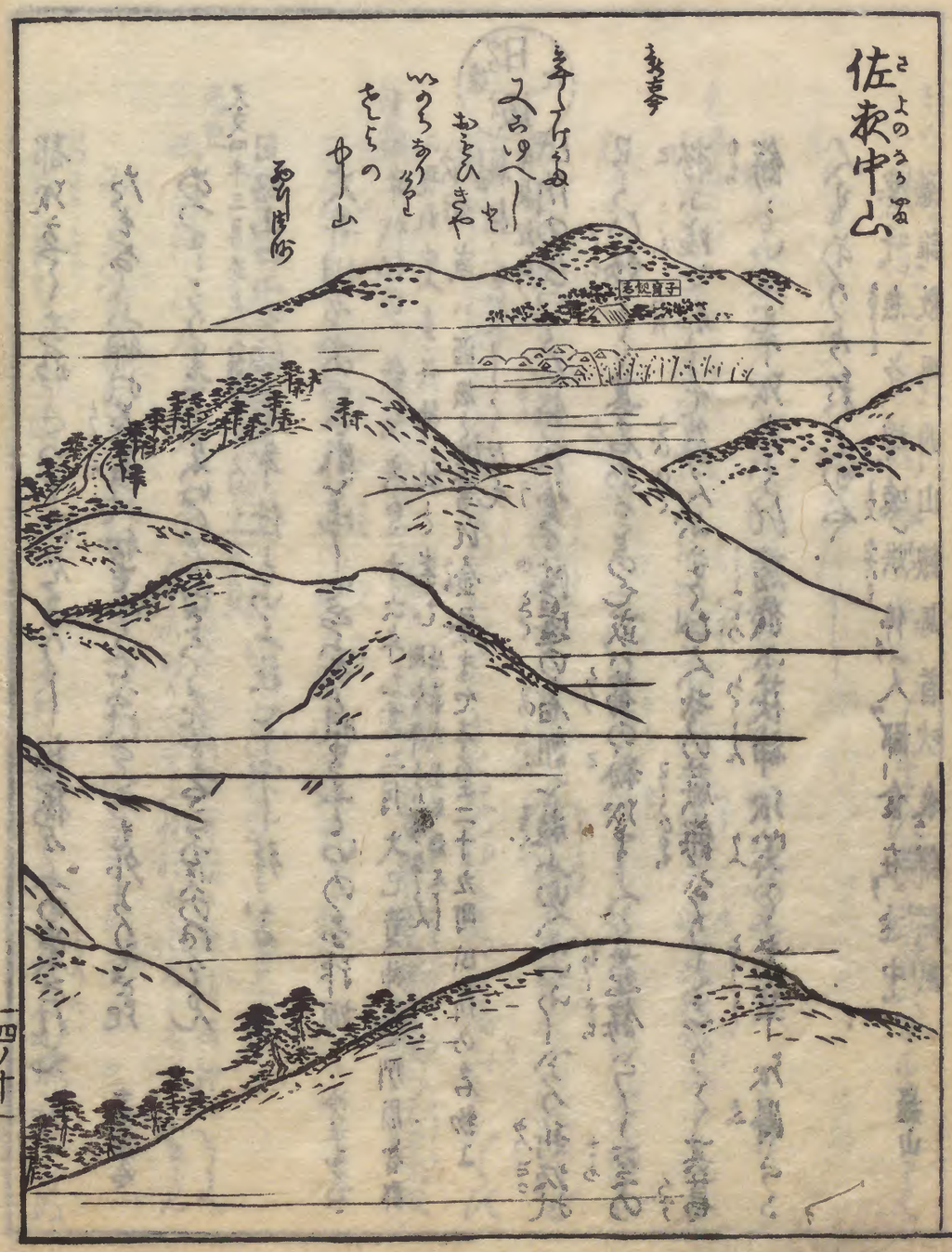
粉ふ塩を和して旅人ふまゝむ人我の蕨餅ゝゝとゝゝゝく其葛

餅といふ年に入ゝゝ諸歳ふ茯神に笑ゝ老芋に得ゝる

人もあゝゝ和とゝ

婆叶焦子婦喚烘俾人部食在途中

憑誰救得西山餓馬首次來餅餌風　羅山


佐夜中山

佐野中山

相模の東の方に東海道駿河荒井新坂より東へ入て佐野中山いにしへ法門抄に故る東へ入て佐野中山とあり宗祇の方角抄にいたゞ小野の山西の禁所新坂といふとなり宗久が都のみやこの中山さやの中山とつゞけ侍りぬるこゝ紙さやの中山と詠ぬ中納言師長公吉田の住ゐ〻て〻りのひ〻る時土民にさやの中山を作り侍るこゝ中古のせん達みじかくもさやこゝふ渡れく作る又源三位頼政いさやの長山と詠り侍るひしくびび老翁より歌より紀と云云又或云歌のこゝろ紙衡ざりあるさやの中山と紀按るふ此山遠江國佐野郡にあり此例まこゝ〻〻いうこゝろ名高さや名所ふく勅撰ふ古今集紀友則

古今東歌

東路のさやけ中山さやこゝ小野しうくとをひ初ぬん

千載

ひのひ紙さやふもみゝこゝ〻くしるくとこゝ雲さやけ中山

新古

古今の〻ふれ侍さやひとて月ゆゞちかるさよけ中山　八条院大納言

同

岩ゆひの床ふゆ〻〻紙行さやて行ゆんゆよ乃中山　後京極摂政

續後撰

ひう紙いちや書白〻作無月時雨てさやの中山　藤原雅経

新後撰

まちたりんさ夜の中山中〻ふ一年は〻紙時もう郎　道生法師

同

名ゆけ言を葉乃里ふこゝ捨て後涼くこゝ雲さやの中山　西中納言実家

續後撰

夜ゆ月大臣

新後撰

旅衣夕雲さむさこゝけゆのさやの中山ゆ〻〻吹や　夜ゆ月大臣

續後拾

藤原有貞

旅行さるさよの中山ゆけこゝ行てふ〻る雲ゆけ樓雲

續千

月待て行ゆ紙ゆ夕雲い道こゝ〻〻さ乃中山　二条大納言為氏

風雅

旅ひすこゝさよけ中山さよ中に鹿も鳴こゝ〻〻立こゝ〻〻さ　播磨仲朝臣

同

雲けもこゝいの波とふひひて嵐と〻るさやけ中山　前右兵衛言為廉

新拾遺

ひひひ雲行いさゝこゝ〻ふ〻〻こゝ〻〻さやけ中山　叡直法師

とちさ花の雲けさゝ山ふ仏ゝくゝ〻〻ゆ〻〻けゆ里ふ

菊川といふ所あり

ふゆ〻〻ゆ

ちえ〻〻雲ゆ〻〻けさとけ夕間ふ松風とゝるさよけ中山　阿仏

あ〻〻紙ゆ紙ゆ〻〻みれゝ月もゆてふ〻〻

雲ゆ〻〻ゆさやけ中山さえぬさけ都ふつけよ有明の月

ゆとやい〻〻雲こ〻

ひこ〻〻んとひゆきを〻ひつまちにあり

菊川の水

雲助行

雲助是何者更非
雲助兒尋昔元曆
歷如何今此姿一
朝蒙勅當十年受
艱難踏鹽體能固
王秋肌每寒玄古
餅追咽坂東酒流
身雖瘦我非病雖
壯唯是貧袖壞肘
自見裾斷足殊輕
徘徊街道筋欲拔
生馬瞎夜宿建念
寺月當勝肩濃偶
雖一盃受未見在
所松莫謂吾無含
幕天坐太平一本
有竹杖萬里可
横行

銅脈

光孝紀

佐保中山は古今集乃歌ふよとうたるやよまれて歌名高く
名所とは安とを紀されもつくるふいとしくんぐ我しゝ山ふ源山ふて
松枝あゝしたげしくゝ面い野山ゆく秋の花つゆのまぎゝ谷とう
峯ふうゝる白雲よ分入よくちして麻の苔源とりもわし
出の孫おつを源しゝ

あこ海ようふ峯はけちゝ正絶して雲ふ伝とふ佐保の中山 光孝

東應法師之記

佐保中山ふゝ此山口紙ちぐゝ光れが花ふ源谷石も源谷一峯
みぐきみちゝ塘のうゝ仏ちうあ谷の楢紙眼下ふんて猪ちゝ鳴を足
の下に聞谷のあ行ち高くゝ山のあいぐ紙ふれば中山とんくちう山ち
むゝ処折のこちふる紙ぐゝ楢ちゝたるまを忘千條のみちう
みるちさゝ山所ち其名ゝふ少ほるちる紙れど一時のほちふ百般
立ぎまりてあ行光ゆけが秦蓋の夜のきくいぬれぞゝて耳とあゝひ
高強の風のひぐ紙ふ光ちゝ山ゝ身ふゝむ

ゆけのほちさよ井中山ゆくふまきをゆあぐりてゝうる

曙記

佐保井中山ゆみを海道ありとゆひゝさを西中ぢうゝ抜りちく
ほくゝなりめて
うれゝちもうゝ紀もつをれく今ふまくまけあしのされ中山 光廣々

東紀行

陸奥ふほぐく松ふかさくのゆくゝ紀さ佐の中山 馬村々

丙辰紀行

糸佐法師ゆいのちゝ紀ち佐の中山と源ぞゝいさく歩あの中ゝ

坂一道、升降是、早一天夢殘馬一上不成眠、羅山
此山無限西行。壽能使詠歌千古傳、

佐法石 佐保中山真中ふ佐松の傍ふ石の東ぞ町ぞうゝ

妊婦塚 新田の茶屋ふ貴ゝ左側ふ高の由来板行ふ

の女あゝ金谷の宿の主ふ通ふ日坂ふ妊婦身
墓ゝ従ゝ山ふ山越出ゝ
此婦の日ゝ会ゝ生る産ゝ出ゝ
赤子ふ出ゝ産ゝ傷ゝ現ゝ
ゝ生る成人の後今ゝ紀ゝ
ゝゝ絶よ佐田の宿ゝ
ゝ対ゝ其證詳ゝ

夜哭松 佐保中山街道の佐松の傍ふ石の東ぞ町ぞうゝ

左側ふ高の由来板行ふ
ゝ日坂ふ妊婦身
ゝ中山ふ山越出ゝ
ゝ産ゝ傷ゝ現ゝ
ゝ産育ゝ
ゝ中山ゝ
ゝ諸国ふ
ゝ盗賊の故ふ

菊川

菊の一番手
徒北 砦
信右ヱ門

菊川宿
中御門宗行つゝ某の
乱れふ様舎ふ捕れ
東ふくりゆ御ば菊川ふ
宿ゝ菊ふの下流ゝ
数ふ延るゝ菊川の名景
令を滅ゝしゝ八野名を
ちの孫ふ者遺れ
諸者ふ又八ゝ
かの晋の屋ゝ外壁ふ
信ゝ二郎ふ
殺せゝふも
比せんふ
浪速春泉画

百生りや
夢
一きりの
ひらり
千代

子育観音 小松峠にあり久遠寺といふ真言の草堂し子育観音の由緒
あるよしなり本尊正観音 基僧正の作 長五年関ヶ原
天正年中の境内に石表あり其文に云慶長五年関ヶ原
の役の時山内對馬守一豊此地に陣を築き
陣初将軍家狩饗應したまふ一遺跡なり 遺跡なる舞堂 近年に明
九年此石表を建るとなり
四郡橋 久遠寺の東にあり南國 蒲原郡 佐登郡 城飼郡 山名郡
等の四郡の境なしそこを指ふ古今の往来なり
菊川 菊川村にあり川上に菊川村むらの
駅場なり今は支場となる此所に矢根鍛冶今にあり
東鑑曰 十三日甲午於遠江國菊川宿佐々木三郎盛綱
相副小刀於鮭楚割 居折敷 以子息小童送進御宿
申云只今削之令食之處氣味頗懇切早可聞食
歟云云 殊御自愛彼折敷被染御自筆日
まちえるのおさけもすそ濃にいろあるこころ
頼朝々
義経記云 義経三年七月中御門藤中納言宗行卿小山新左衛門尉具〻
てあり名ぶ遠江の菊川宿ふ着ゆふ夜をばいかと問ゆと菊のとり
すゑまで
則おふ流くごさん俊とゆるしべ硯乞歩く宿の柱ふ書はゆゆ

昔南陽縣之菊水汲下流延齢
今東海道之菊川宿西岸亡命
光行記 菊川と云所あり名ふ秋の比中御門中納言宗行卿
罪ありて流罪ふ被ふ流ふ宿ふ向りしかるに昔南陽縣
此菊水下流を汲ぶ齢延のべ今は東海道乃菊川の西ふ宿して
今ぞその家と陸ふ書れしりるとなりをたれあれ
ゆそその家と名るに火のあらふ所ゆてられをを渉ねうゆ
者あり今はのかぎりとくのあるとさらん形見さ伝ふ成ふ
名ぶ歩はるるれをのかひいとくをふうるうまを
書はくる形見をかふるまわとふと雪とまれらひらん 光行
貞應海道記 胡馬北州光はれ〻日鳥翅さぐりぬれい羊余を屋〻あらんぐ〻ん
菊川の者ふ海ゆ或家のちゆ〻屋ふ故中御門中納言宗行卿
書付られしゆ彼南陽縣の菊水下流延齢をのべ東海道の
菊川の西岸ふ宿りて命を全くせんとなるとにあられとそもあがれ

其身も累葉の賢枝に生れ其官は黄門の高き階に昇る雲の上人
の月卿なれば冠のかつらはまづ仙洞の花の下雲錦の袖の色もあり
栄ふ身さへ栄分にあまりて時しも花と匂ひしかべんそれをかざ
してちる花もさぞあひ遠こともなびさしもかなしむべくぞやある
べきさてもあさましや去る承久三年の中旬天下風あれて海内
の浪さわぎ闘乱の乱将や花城よりこぞれ合戦の武士も夷
国より起て暴雷雲の害うけして日月光もおほはれ軍兵也たを
うごかしてこう欽威とぞあふ　下略

去ば後あれども秋ぐさのみとせさきくまどの旅人

太平記後基朝臣再び関東下向ありし時宿の名を問へば菊川と答ふ
承久は軍に先親の院宣書たひし罪によりて関東へ下されし宿にて
昔南陽縣菊水といふ四句を書しし半を思ひ出て遠きむかしみ
其み跡今は我身の上となりぬれやいとど傷さらんと一首の歌を宿の柱に書れける

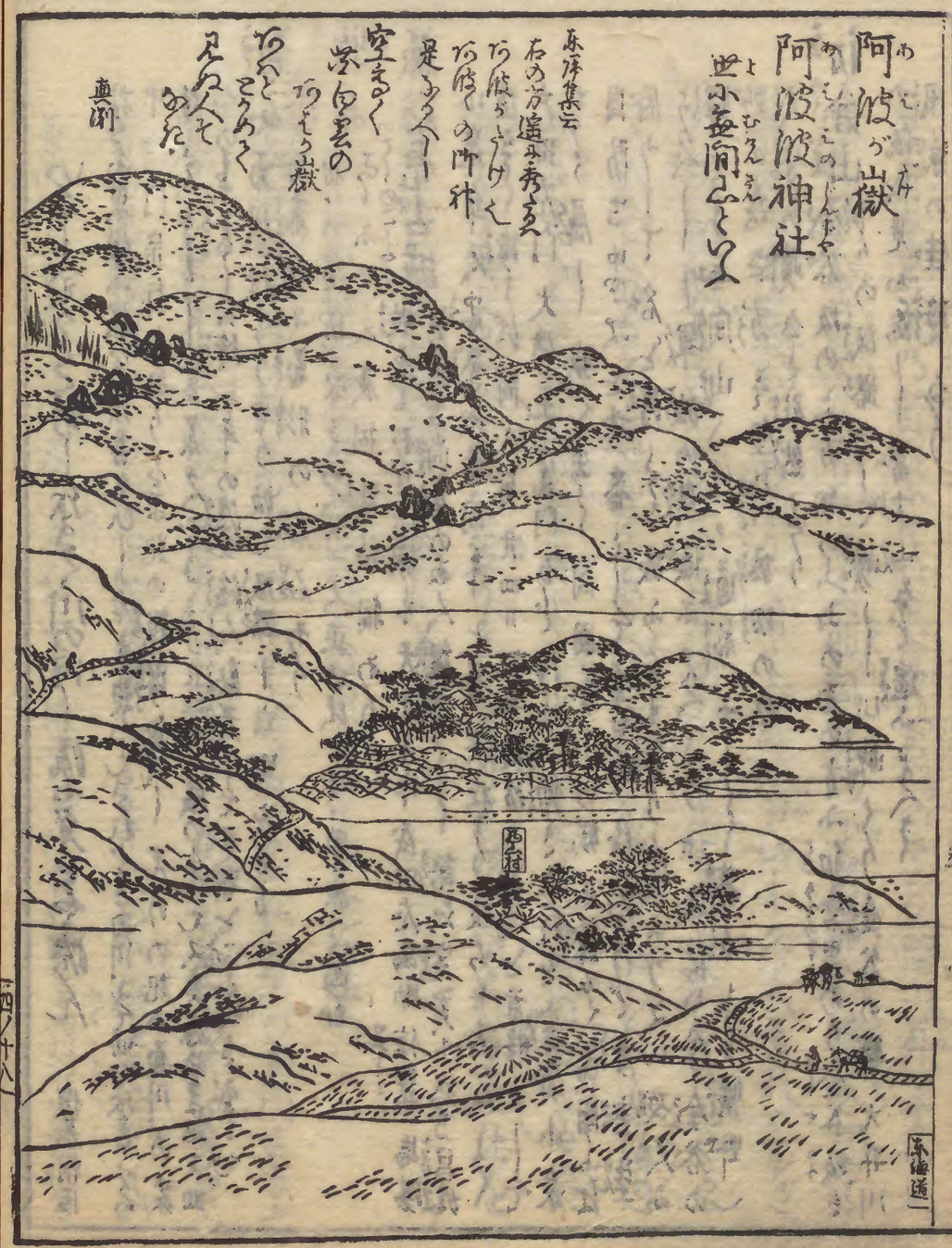
いにしへもかかるためしを菊川の同じ流れに身をや沈めん　後基朝臣

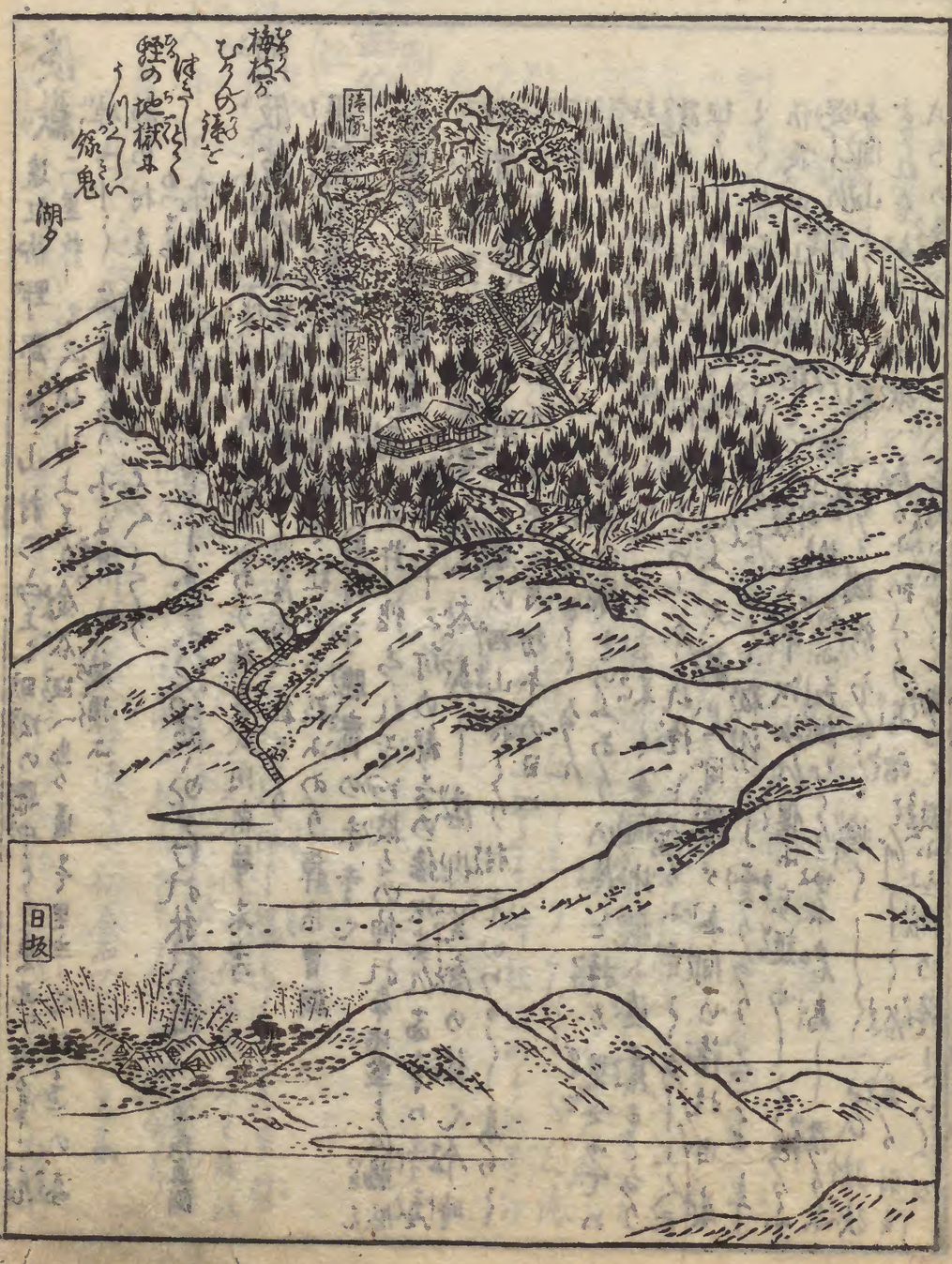
桜の木に東鑑に院宣を書たひし光親はさきにも菊川にて四句を書てある
中御門宗行卿も光親の跡の記の流あるべし　光行の記に菊川の家
焼けると書しは承久三年より廿二年後の事にて貞応の記より四
句の事書しは纔二年の後也　後人勘考して是非を正すべき事也

菊坂　菊川村より坂を下りて坂路十六町也北の方

牧原　男鹿村に菊形の名石あり

諏訪原古城　初めは諏訪原といひ天正の比より牧原と改む
諏訪原古城　牧原にあり此城は天正元年武田左馬助信豊馬場
美濃守尚房の両人縄張して築く室賀下総守昌清
小泉隼人忠季是を守る同年七月浜松より攻らる両人よく
防ぎ戦ひしに同八月廿四日松平周防守忠次を首将として
戸田左門大津土左衛門などはげしく働きしかれども室賀小泉
ちから尽て城を出て同国小山の城に籠る又諏訪原には
周防守忠次を城番として在せらるにはげしく要害堅
固にして名を得たる城なりしも夏より人に攻らる
駅より無間山の道筋にして今は金谷の曠野也
べし寺の麁さ行程の悪道にして今は城所はり
天守の跡など残然として
初倉山　金谷坂の上方より山の南の方に初倉里あり金谷坂を
の流を見おろして坂路にして富士山など遥かに見えて
風景の佳境なり　金谷の駅　大井川


阿波ヶ嶽
阿波波神社
世小無間ふとい
東海道名所記云
右の方遠き秀峯
阿波ヶ嶽の所作
是あるべし
空そらく
雲白雲の
ちとう嶽
ちくとうくと
ふるくとめた
真淵
西条
東海道


梅枝が
ひろの後と
はくとくく
鉢の地獄ヨ
ふりくい
餓鬼
湖多
日坂

淡嶽 遠江依野郡西山村の山上に映坂の驛中より東北へ入る事二里許に又山上より金谷坂へ出る道を里半に山を越の高嶺あり海道より小さき中路杉の村を蔡分して

東海道名所記に云

阿波波神社 尚國依野郡四座の一社なり 延喜式内東神社考

無間山觀音寺 尚國久野村可睡齋の住寺 禪宗曹洞

本尊千手觀音 長三尺許 作法所の觀音の後に弘法大師堂 脇侍

住僧もなくして堂舍庫裏等大小叢の西山村荒廢の体し今時

寄宿の居の地もなし毎年二月初午の日

法會に近郷より紙俵に無間の袋と

云山伏無間の袋と

故に量の賦實と得るとも無間山と

むり山堂下へ埋もれ又鶴見因幡が無間の袋に由来

依知の中山盛陽記に

足利倶利伽羅峠へ

無間山

賀茂真淵

半鐘 觀音堂の縁側に掛る 銘に云 鐘 見長寶寺

遠州濱松庄宇布見去依太祖舞忌

勸進檀那阿闍梨去

永和二年丙辰二月十五日

堂守云山伏の

山伏荷来り云多く尚國長宝寺

又一説に無間の袋の明應の比

古井の底へ投入

又一説に幸に其時我等揚負に勝

古井の底へ投入

延喜式神名帳に

敬滿神社 遠州泰原郡谷口村に大井川下流 延喜式云名神大社

大井河 或 大堰川 又 桜川 遠州の山谷より流る

藤枝 水源 大堰川 遠州の山谷より流る

金谷 遠江

大井川の河原道

石径

蔡分

嶋田まで三里道多くして

宇津山をあゆびくるしつゝ
ひのくるまとのやいとをとゝ
ろ
ゆくすえのそたくんおもの
のけとしたゝらは
さひ出る都のこゝちおもひ
いくしの浦の
光孝紀
おしてしらのはなあうゆる奥より大井川をわたりそしれ
ちるくるしき多くさの水ゆくちふ一ちぎりなくゝ流れ別れ
ゆの原くも出かく入ちるふ松うり中くとうてんんとう
もよ和あ山ゝ多く覚のまいりのみちんこ旅くなるれろん
龍田のかゝりもどもたづ
日数ふる事ひのあそれい大井川とうぬ水もふる色ふる
後基
大堰のとるまへだ都ふあしゝ名ゆ岩くゝ亀山殿の行幸ゆ嵐の
山ゆ花盛り龍頭鷁首の船ふ乗持歌管絃の宴小侍ゝ事も
今ゆ再びゆ見ぬ世の夢と海ねとおもひはぐけゝ
東武紀
涙ふ測ふさひのそさゝ大井川の人の心ゆ底も無ゆ海ゝ

澤庵和尚

駿遠兩國堰　大井川の事を駿州と遠州の境西の方へ流て
丙辰紀
大堰川の駿河と遠江との堰と明日香川ゆゝ孫と霖雨ふしを測瀬ゆい
る事たびくゝなれば水ゆ山の岩流れて田の驛川の原の中にあゝ事も
あり西のゆゝふ流ゝ金谷ゆ山ふ抜ふ事もあり又一ちぎの大川ゆゝ大木
沙石ゆ流を事もありあまゝゆ枝流ゝゝりて一里ゝりゝ間ふつゝる事
をありゝゆゝゆゝゝ徒杜樂梁ゆりがゝゆゝ往来の人馬河の
瀬ゝゝゝゝゆゝ金谷ふ待もあり田ふやゝまるもあり渡りゝて溺ゝ者
もあり辛ふゝて向ひの岸ふ至ゝも田ふ田金谷の民ちのゝ家ゆたゝゝひ渡る
ゆゝも旅客の裏ゆむさぼる田ふ法水を抜ゝ賣炭翁ゝ草夜ふゝて年ゆ寒ゆ
を待ゝゝゝゝの水ゆ家ゆ流ゝ田を換ふゆゝふ防暗河使防葛野河使ゆ
乗れゝむゝ出ゝ事も口いとあゝひ出ゝゝんや

羅山

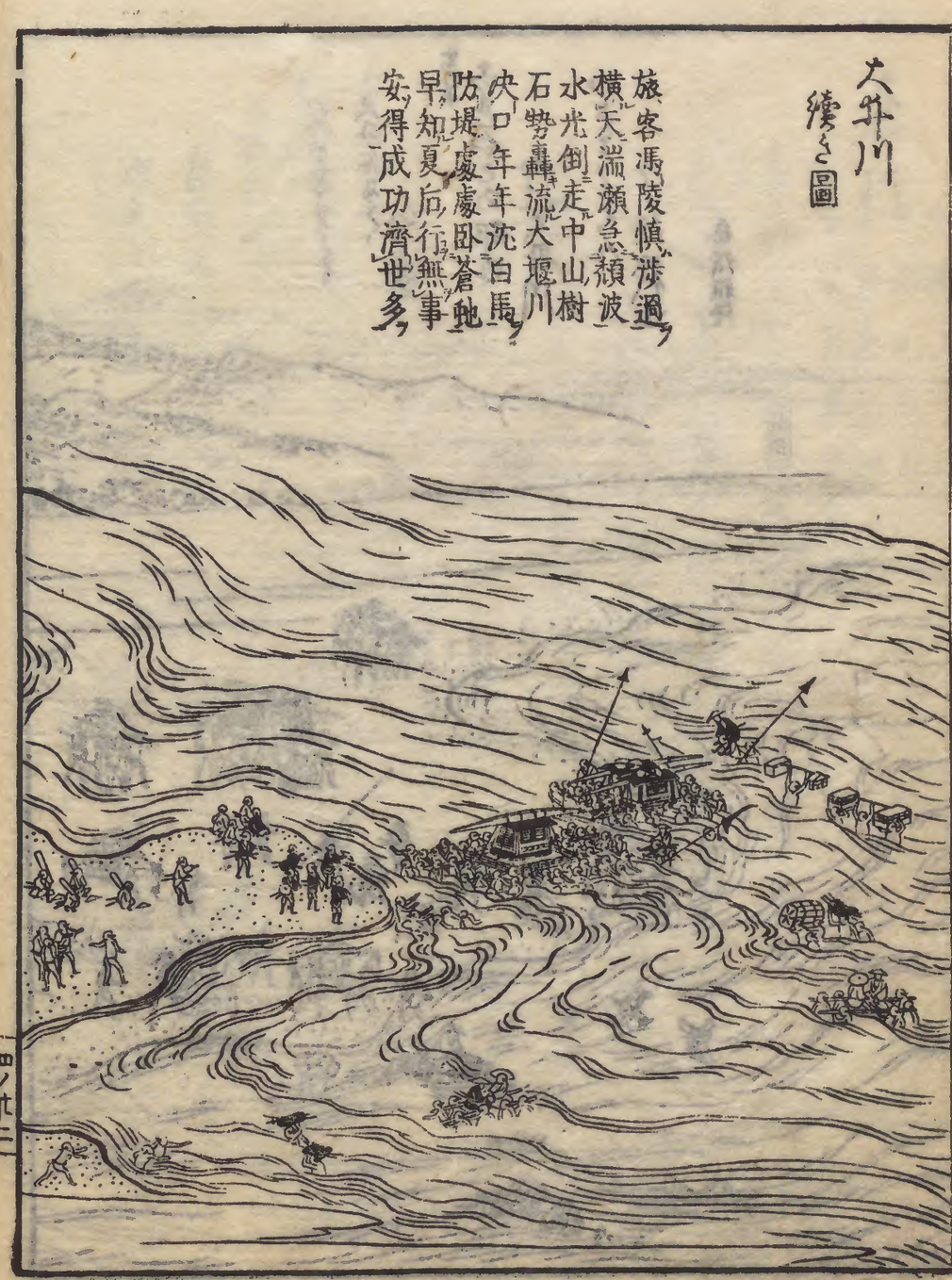
○尋常揭屬心。過腰叱馬呼奴魂欲銷
來往就中何處苦無舟無筏復無橋
○海道奔流弟一川鑑輿舁載擔夫肩
洛西大井雖同稱此不省桴彼有船

大井川
大井川あらぬ
波の音や
石万石代
波の上
湖夕
佐田

めづまんてろこそ
大井川あらく
いてこそ
蕪集
さるとやこの都の
西れ大井川
いてこそこそん
こそこそ筏士
森孫雅作

大井川
續き圖

旅客馮陵慎涉過
横天湍瀬急頽波
水光倒走中山樹
石勢轟流大堰川
夾口年年沈白馬
防堤處處卧蒼虵
早知夏后行無事
安得成功濟世多



乙卯仲夏從東関
歸路憩嶋田驛長
大久保氏家主人憶
大井川渡口其芳志
殆厚矣

されど此大堰川は東海道第一の急流の大河にして薫風にもみかさは
増し穴は吹ぬれバ水落ることなしより舟なく橋無にして渉さく
旅人も嶋田金谷の川越所に至りて何れか川の定免を定て其賃は払ひて
剣荷をなして渡丁に越さしむ蓮臺肩車などは分ちありて交易の賈人
京宅の吾妻下り伊勢まいり富士詣など八人掛の臺に乗られ又ハ肩
車にて渉るもあり相撲は関取は人を雇ひて自ら裸にて土俵入の如く
渡るもあり水勢ちからにや劣まさん波と左右へ別るる郷相の雲客烈
國の諸侯ハ駕ハ臺に居て多くの役夫にゆつて昇渡し水堰の備まへお渡
に國ハ急流に足ハ掛へ聲は合しく渉ハ紅葉ちり時あまる沢ハ水落て
冬川の寂しさに渡丁ハ弱りみつき渉も夏にハと賀ふ入しかしうり此渉沽
羅山子いへるかく已が業の戸ハ流されども首にかけの備銭を納めて
五月雨の水に威をましかり酒の就を拝く所にて小宴に嶋田金谷の渡丁都
て七百人に霖雨降止むして水きはまるまでに止まつて東西の驛中所

せくまでふせぐり一驛二宿も跡へ戻りて水の落るを待もあり又追尾より
渉りて藤枝へ出るもあり是は此の先に安部川冨士川酒匂馬入六
郷など云川々ありみる者れに准べし淮南子に水神は天呉といふ
又水伯ともいふむかしより此川に至つて掛遁まる急卒の旅人も是れらの
神の機嫌は獻くあるまさは易からべし　後白河法皇の御詞午
鴨河の水と雙六の塞とぞ朕が意に任かざると仰せられ
しも同日の論とぞ云はれける

嶋田（駿河）

藤枝まで弐里八町此宿に大井明神とて此所の生土神あり例祭九月十五日なり右村は旅所とん

風雨頻ニ來テ宿ス嶋田ニ　家園万里思ヒ茫然
通宵漏却ス簷ノ滴リ　坐ラ到テ天明ニ不レ作レ眠ヲ　山崎闇齋

東紀行
嶋田はあるに旅が家にはくしうれ花をおりて花瓶にはさみ
岩ほしまさうは後かね春の道に初の花をおもふてる　冷泉為村卿

瀬戸　嶋田より壱里許北にあり和名鈔に西刀と書して益頭郡に入る之今は志太郡とん海道の川を瀬戸川といひ川岸の山を瀬戸山といふ又此所より地蔵堂あり

冨士紀行

名物漆飯 瀬戸村の茶屋にて強飯と山梔子わく漆てそれと拵ふ

岡部まで三里廿九町 此驛中 左側に志太郡右側に益頭郡 宿 鮮魚多し

藤枝（駿河）

風土記云大賞二年更為新驛 云 此宿

家集 妻とまりの名さいたれもとのとあるのもかれ藤枝の里 秦滋雅経

冨士紀行 妻のもの花と白うん秋とやうやう葉色ばく藤枝の里 亮孝法印

青薜 縁 蘿 恰 好 述 藤枝 村 裡 數 五 猶 階齊

家 家 不レ解 閑 人 意 春 杵 聲 忙 八 月 秋

田中城 藤枝の南二十町 信 蕃 ふ こ の 同 年 五 月 三 日 遠 州 浜 松 攻 ら る

依田つ く 防 ぎ 戦 れ く 雄 雄 支 せ び 同 九 年 二 月 二 十 日 又 攻 られ る

で 依 田 ち ら る 甲 州 ふ 走 る 慶 長 六 年 酒 井 忠 利

拝領 同 十 五 年 ち り 所 番 城 し 慶 寛 永 九 年 ち り

諸 疾 代 々 在 城 し ゆ ふ

蓮生寺 藤枝ふ ゆ り 宗 信 東 本 願 寺 祖 親 鸞 聖 人 東 國 経 田 の

時 ち ば ら く 逗 留 し 春 跡 と 家 督 争 ひ し く

寺 説 云 む ち 熊 谷 次 郎 直 實 親 族 久 下 直 方 と 家 督 争 ひ し く

臨 舎 に 逐 電 し 伊 豆 の 走 湯 山 ふ 登 り 仏 門 ふ 入 く る れ ら り 上 洛

て 黒 谷 の 法 然 上 人 の 弟 子 と な り 出 家 し 蓮 生 法 師 と あ ら た め

故 々 熊 谷 へ ゆ る る ち ま ら く 此 藤 枝 の 驛 ち 宿 し 其 の 夜 蓮 生

法 師 宿 の あ ら じ ふ 云 ら れ 故 郷 へ ゆ り マ 上 洛 ま で 俗 用

し く れ ち し く に 帰 其 質 あ り し く 念 仏 十 遍 に 換 け 蓮

ゆ り し い 遍 う し ゆ ら ん 十 念 に 換 け ま ち の 蓮 生 坊 び て 熊 谷

ゆ ら む ち 親 族 ふ ゆ る く 遇 く 又 上 洛 の 日 に 宿 ふ 至 り か の

ワ れ ふ 返 し ゆ ん と い ち 亭 主 云 ら れ 賀 ふ 入 れ し 十 念 今 日

ゆ く 外 ふ 行 も 記 り し 蓮 生 日 其 念 仏 あ ら ら

ワ れ ふ 授 け 奏 し ゆ く と い ち ら れ て 不 ち 儀 な る 此 奏 の 海 ち 初 め

に 蓮 生 ふ さ ら け ゆ く し ち ら 青 蓮 華 十 莖 咲 出 ち り 今 ら 又 五 を 時 ふ

念 仏 に け り け り 時 ち り 蓮 華 一 莖 づ つ 海 に 失 る あ ら し 此 寺 特 に 感 心 し

念 仏 一 遍 ふ 蓮 華 一 莖 と 流 し 責 ら 一 遍 へ ち り し 賜 ら れ ふ 殘 し 生 極 楽 の 資

用 ふ い ら し 度 と 願 へ ち 一 遍 に あ ら く 上 洛 し ち ら し や

あ ら ば そ れ ち り 念 仏 門 ふ 帰 入 し 家 に 寺 と な り

親 書 聖 人 を ち く 名 く 蓮 生 寺 と 号 し 其 蓮 池

の 跡 も 今 ふ あ り 熊 谷 蓮 生 一 生 記 ふ も ち く ち り

岡部（駿河）

九 子 ま で 武 里 此 宿 の 西 ふ 八 幡 村 と し て あ り た の 方 れ 山 上 ふ

宿 あ り 土 人 岡 部 六 弥 太 の 盡 に 祭 と つ ら れ 謂 し 六 弥 太 八 戒 盡

岡 屋 敷 と い ち 岩 非 矣 濃 度 の 生 土 神 と し て

新拾遺 法印定圓

家集 建長元年 藤原為家卿 家に寺と

手枕名家 藤原為家

海道百首 夕日さしてるものさし山陰ふして 春儀為相

名産
瀬戸深飯

光行記 罌部乃いまもく松おるほくかと山れ松のうげふをうゝいれひをと
とり出るふ荒すさはしくもちゝふひれてうゝ変れまゝ多
根ころもうすきたなとにさむくちはゆ
ちれそこの手木れのゝ思ひるれあしよんゝてこけ 光行

曙記 岡部の里に櫻一本咲こる松ゝ

あさ霧れをゝ乃ちゝ一とこれ枝れこゝ花ちぬそるゝん 光廣卿

那閑神社 延喜式内 今土人虚空蔵と称ん 益頭郡當目村ふあり 岡部とり十里許南こ

宇津山 宇津の谷嶺 宇津谷口より坂路くまれとりの山と 今名鈔内屋郷有 慶郡とあるゝ安信
郡ふ属し十石坂ふ西行山最 撥寺といふあり西行の妻ゝ佛といふ
千手観音 太閤小田原攻の時 御勅願所あるふ石川氏といふ渚あり
領し今ふ傳来 ゝゝ家宝 ゝゝ石の厠服松拝

蔦細道 宇津の山ふあり海道 巡礼の時 狭道とゝん 古の
細道 所の者 武人 業内者 備ひゝ
業内の者 ゝゝ者 ゝ
ゝる二人 縁松 篠 ふ入ゝ 蔦茅松刈ゝり
道と分る 系 竹 邪ゝゝ
中ふ嶮路所ゝ

夫宇津山蔦細道ゝ勢ふ歩ゝふゝ長名高く古歌多ゝ上方
ゝりまゝに至るふは岡部ふ駿ゝ海道松ゝ里許ゝ湯谷口阪ゝ下とふ
所ゝりゝふ鼻取地蔵堂の向ふ熊野権現のゝゝれ例ゝ右ゝ方入ゝゝ
ゝ道細くいとめる溪川ゝりゝ流松右ふ流左ふ流ゝ石ゝ橋五ゝゝ
坂路ふゝれゝいゝゝ道細くゝ山源ふして幽寂ゝ茅ゝ荻萩篠
生成りて後蔓蘿ゝゝ足ふ絡ひ藩薇荊棘袂を閉ゝ歩ゝ
二人のゝ者ふ右縁松ゝ義と薙刈ゝ次第ふ歩る路峨ゝ
杖をちゝふゝふゝたゝゝ所ゝりゝ松神社平とふむゝ社ゝり
ゝ古蹟と教ゆ按ぞるふ駿河風土記ふ宇津谷本原神社い
仁德天皇紀七年乙卯形祭やゝゝゝ神社の古跡ゝゝ古ゝ
其上の方に猫石とふゝゝ古松六七株ゝ法ふ猫ゝ卧ゝる形ふ似ゝる巨巖ゝ
ゝれゝゝ又ゝゝるゝ削頂嶺ゝゝゝ所ふ歩ゝゝ山部伯ゝゝゝ伐木ゝ

唐土へかよふにも劣らんや實に陶潜が桃花源に至るの傍ありこれより
東に落る阪路いとゞ嶮しく且真砂地にして踏止がたくまくりかゝみて
静に下るおもしろき所へ出れば又溪川あり其辺にも石の橋あり路も鋒
にして段々下る所遂に宇津谷嶺の東宇津谷村名物の茶店の傍
たつる橋といふ北橋の東爪に出る是本海道也初北湯谷口より
此所まで道法壹里に足らず此をいへりされば蔦細道といふ

伊勢物語云
ゆき〳〵て駿河国にいたりぬ宇津の山にいたりて我いらんとする道は
いとくらう細きに蔦かへでは茂りもの心ぼそくすゞろなるめを見
ることゝおもふに修行者あひたりかゝる道はいかでかいまするといふを見
れば見し人なりけり京にその人の御もとにとて文かきてつく

新古今　業平朝臣
するがなるうつの山べのうつゝにも夢にも人にあはぬなりけり

先達
袖中抄云古注に此まり有ハ僧正遍昭の事といへり高流の用を致べき便宜
なるべしとも業平に人に逢ぬなりといへるはあらぬ所たるべき
あやしと後京極摂政も此歌を
褒美し給ひしとぞ

新古今
旅ねするゆめぢはゆるせうつの山関とはきかずもる人もなし　家隆朝臣
詩とを心にあり也作し小山路秋行とゆふろそろと

同
都にもいまや衣をうつの山ゆふ霜はらふつたの下みち　定家

同
袖にしも月かゝれとは契おかず涙はしるやうつの山ごえ　鴨長明

續古今
ふみ分しむかしは夢かうつの山跡ともみえぬつたの下道　参議雅経

玉葉
夢路にも都しるしやとをろうつの山蔦はふ庵　俊成

新千
あらし吹高嶺の雲をかさしまて宿りも遠しうつの山越　前大納言忠長

新拾遺
寄しるの夢路は北ころことを分かな夢路にかゝるうつの山道　法印定円

新後拾
里まではまだ遠かるうつの山夕ゐる雲に宿やかりまし　尭尋法師

新拾遺
昨日又越ゆるやひんよもすがら月にぞ越ゆるうつの山越　藤原政景
右大臣富士見んとてあづまへくだり侍りし時宇津の山をこえ侍るとて参議雅経ふみ分しむかしの夢のうつの山とよみし事を

新續古
昔きくむかしといひしうつの山こえて我ふむ蔦の下道　権中納言雅世

また
色くれは木葉しくれてとふ口ゆてうつゝも遠きうつの山道　俊成女

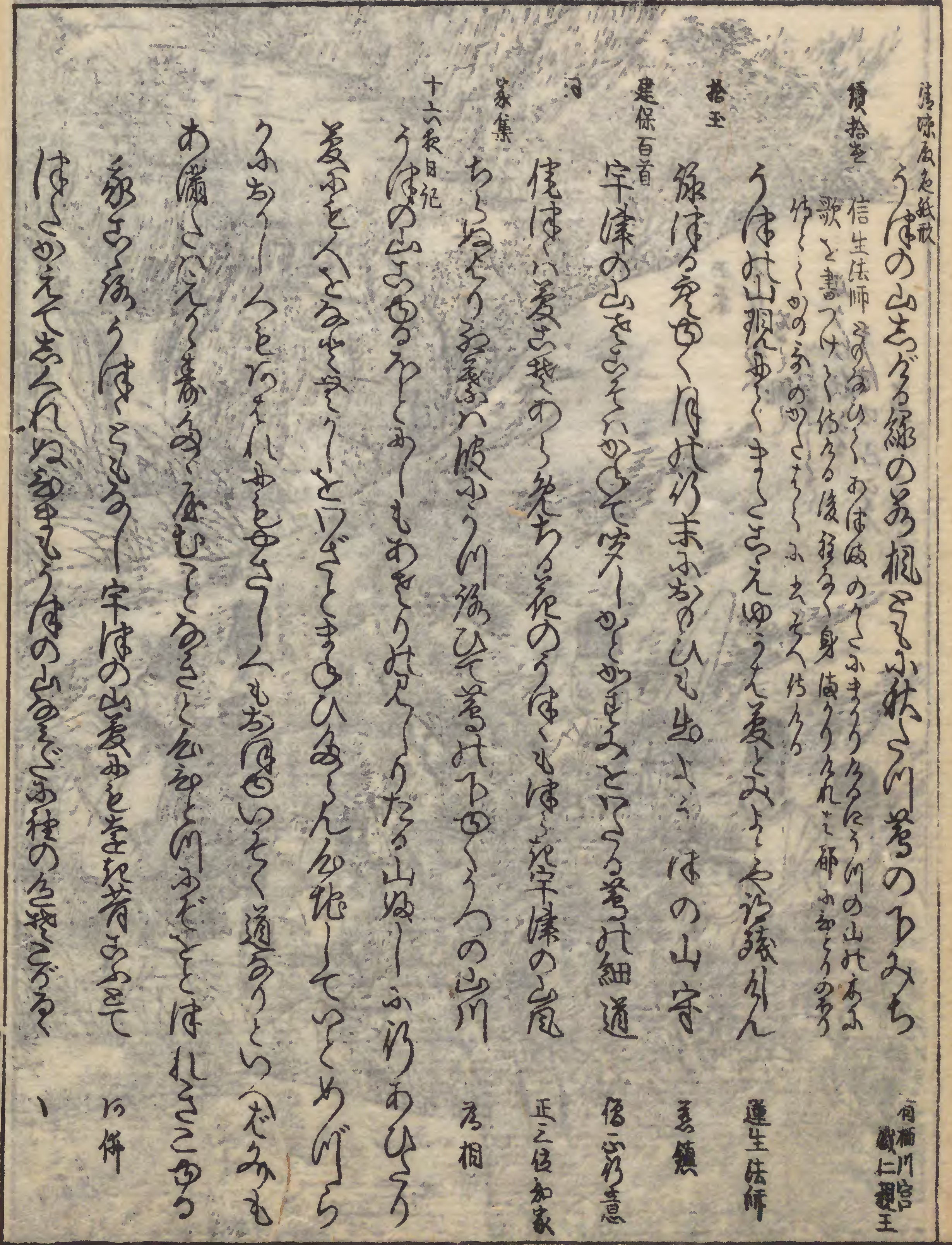
同
都より思ひし我は忘れ神無月いかにしくれんうつの中山　従二位為家

宇津の谷山
葛細路

宗尊王
はの山通り

法橋弁慶

玉茎
ちはやぶる
神もあはれと
思ふらん
はつかの秋の
はの山おろし
中務宗尊親王



清涼殿色紙形
うつの山こゆる絲の木の楓さそふ秋の川蔦の下みち　有栖川宮職仁親王

續拾遺　信生法師　うつの山ひくゝおはしのさゝふまかりけるにうつの山はあまたの歌を書つけゝ仍る後程なく身過りくれと郁ふ知らうの方侍りしかの方のかさつゝふそえへ侍りける
うつの山わくるまくまくさへきえゆうそ夏とみよとや残りけん　蓮生法師

拾玉
旅ねする夜ふかく月は行末におもひも出よ　うつの山守　慈鎮

建保百首
宇津の山さこえてたかくそ見ゆるをとにきく蔦の細道　僧正行意

同
住はゝ夏も秋もみる花のうつくしき宇津の嵐　正三位家隆

十六夜日記
うつの山とあるかとみしもおもかけにたちかへりたる山ぬしに行あひたり
ちゝわもとり知まゝいう波かうつ川縁ひて蔦の下道くらつの山川　為相

家集
夏かをとゝめてこそ行とかはまさとひとつかんなぬしてひとめかり
かにをうしのもとたのまれかとせまうしものうちにいそく道すなりといへたゞみも
お瀬さいえゝ春やむなむてなさむに河わぞとはれさしあり
家さなうつつもこうし宇津の山夏かと思ひて青葉なるはしもうつの山越えて種のなかくこそある　同仲

東紀行
うつの山をこゆれば、蔦かへでしげりてものこゝろぼそく心ぼそげなりてなん
かれば葉木もむかしにかはらぬなるべし
守をとふむかしのあとのかはらぬに宇津の山は嶮くぞ蔦にはまるゝなん
為相卿の中の紀の蔦かえでしるべしなん今の蔦細道は海ほとりに蔦多し　権中納言為相
多くかれ松杉すみて山は遠かれりその蔦余所にかはりて気の切ごとく多し里人へ海る
ちかくこれをとゝめるふ他の葉しうあるし違つり予まかれ根引して携へ
ふお蔵ふ蔓なるしるし
うつ紀
うつの山をこゆれば蔦くらうへしげりて者の宿たえたれかの業平のまゝ行
者ふ云傳しなんかどいづくならんとうれへひかどにかのほとりふ札をたて
る猶かれて無縁の世捨人なうしとらありて道よりちかきあまうなれたゞかし
立入うらるにまげ寂なる業平の廟れなうふ存とり礼備あり絵像のあらざ
御紙かけなりく浄土乃法文などを書れ其外ふ更ふ見なる物なし
發心のきしめ見ゝねまへいうる身ハかりと此國は者くにして思ひひとゝれる
道ふも侍らねうへその身捨ざるかときたる理を観するふなくへうくれ
と念ずるふ性物甚し難行易行の二の道ともふうけさりとはいへども

山中に旅にある人里に出てはなかなかなるにまぎれるよし或人の教に
従ひて此山に庵を結びはや数多の年月を送りよしとそこらに
肖叔齊が首陽の室に入し猶之妻のたらびとさる許由が潁水の
月にまさりしとのづから一瓢の器をかきらりしといへりひ侍りのあさう
ゆへ殊更ろうたてさるよきぞかしと見へしは柴なりくるるあさきわ中りくも
足ひ来くたるさは侍りり身を孤山あんあつしれうこにやどしてたは
浄域の雲の外にもまさせるいそこどもみくくなぐく衣にたがたし
世はいと不在のおくやさられまし　かかは山色の住家なりては　光行
此庵乃あさり旁往遠かりは峠といふ所あまて大なる卒都婆あり年
経にけるとみ拾るに奇どもあまた出付たる中にへ古書跡は
きくと思にせんうの山あそれも流しはさの細道とよあるん
となりて覚ゆまじ其像に書付し
われも又宴は世に跡ん宇津の山ひとえてあるある苔の下露　光行

宇都の里邑は色そめちろうに遊けだ宇都の山にかかる此山も山中に
山は聳える巧の筆づりるかも碧山之岩石岸の下に砂ながらして巌をたて
翠嶺の上に葉落く壌をほく肮を背に負面は胸にのぞきて顔に
のぼれば行肩桓の膚ながれて草衣かさねとくくも懐中乃
扇を動して微風の枝持可之斯まで森々たる林はよけて巌々たる
峯は就まだ貴名の誉を此山に高し太かさともちさもの木立にさつ為を
わけらきて一方ならぬ感望にちひそぶれくまれば朝雲暮くらし
虎李将軍が栖はさつも暮風谷寒し　鶴鄙太尉が跡にさとむ既に
して赤羽西にゆびはあことにさくぶる物とてや抜原植の葉老乃
ちりまでは疲れきり足にまかせるとのへ苔の岩を勤の下道嶮難にた
へは暫うちながら修行者一夜宿縄床をそだてたて又体や
立ちへれうはの山ぬしてし川てよ都をひはしたさうきと
行くありへをまきさぬるはわひぐの山河の夢に見えはかうつつにうつる

昨日とやいとん者ふとやいもんむしと今とあのくさ我身をこそ今紙
無子しとものくさも部屋いうし古今と角ざ川るとのハワが紙中嶺し
生死涅槃猶如眺夢といへもあられしてあやかれきのかふ行い
ろふの夢とおろ今日此所ともぐる昨日いづ主の所ふしてとハ昨日
とハうん体ふこれるねるうこの業月と夢とり枝花ふうはくぬ昨日
今日は山海い去より雲本の紙

たもやうこのふの主ふおと海ろんくさうはれ宇はの山さそ
家集 一と勝表ふ いりてうの山 ふえんおりしうん 業ろるあく
しの庵ふ立八作りしかしはくんハ其菴の跡もろくろ

和と表術しかやれ松表れ跡も命しあうはう宇はの山さく 兼好法印
曙記

よくく都は半と表に見しうは

古つの夢れ半とひ海方ハ紙と今紙したとうれの山紙 光房々
ひく頃くく入ひて海ふ山や似屏風と劉禹錫ういひ青巖れ形をろぐり
ろまと江の根公れいひしし眼ふさくとる花い奥ふ主ものとみえくくろうぞ

をうとみ枝

見をうとしよ紙今宇はく花れ主れ受紙のうはろ山主 1紙
東紀行 故殿ゆくくせしはもくくの表れろふ又ろ表れ宇はの山
道と後日ものくく八紙

めくしの主のゆくくいはのくくもふ宇はろ八山道 冷泉為村
丙辰紀行 左原業平山とろくくしは考楓いとろくて道もくくしは紙中

たひひ歌紙よみて云伝ろ半くのあ半くもろ半と俗ふ内屋とも書り
山中 囲 首 費 吟 呻 遺 愛 蔦 楓 秋 又 春 羅山
今一古 冥一々 名一興 境 業 平 詞 後 更 無 人
十 蛍 子 も 小 枝 ふ ろり ぬ 秋 の 風 許 玄

むくさ名の葵使や宇はろ山 重厚
岩 鼻 や 小 主 と 眠 ふ 孕 猿 太 祭
名ろる日ふ照らしくくく紙主ものとみち 組風
細 主 や 考 の 主 ふ ふ ふ の ひんこ ろり 鶴 面
雙の日ものくく用 ものくく邦くく時
みどう紙紙とぶふふ川主宇はの山を紙走る雲邦雲 班牛

連歌師宗長の古蹟

駿河　丸子

駿府より東七里半　東鑑に文治五年十月廿日の頃の平太兼倉に命じて所々の駅舎を設け人馬を置かしむ　後醍醐朝の頃許して散位親継に命じて駅舎とする山所に法人馬を置かしむ　願寺と号す禅刹あり

後奈良院の勅願所なり　享保の頃

河の水落るとまりけるを　故殿作下向ありて水まさりて止宿せり

思ひも有かる所なりまくふ所とそ思ふ　冷泉為村卿

名産盆山石　丸子の名産なり　高一

梅若菜丸子の宿はせろい汁　芭蕉

くれぬけどろ〳〵しるとの上とく〳〵ねるの紙よりあり

えん〳〵と後沢たゝえ猛き花を尋ぬるとふ我ぞあり侘　湘夕

連歌師宗長古蹟　丸子の西口六町斜左の方泉谷にあり天柱山柴屋寺と号す

宋屋軒宗長法師は　後花園院御宇文安五年駿州嶋田邑にて誕生

幼して叡智たり因主今川上総介義忠これを愛して左右に近仕する事

三年十二歳にして上洛し宗祇法師に謁して連歌を学ぶ　時に十八

歳にして薙髪し醍醐普捨院にて灌頂を遂紫野一休和尚の禅旨を

敲く四大本來空なる悟を大德寺の山門再興ふ力を竭し緑なる暮ふく風雅ふ
逍遥し諸國ふ遊ぶ明應四年宗祇法師ふ勅を受て新続波集なる撰ばれ其
中ふ宗長の吟隆二十八句あり永正九年今川氏親の招請ふよりくに泉谷ふ
卜ふ居し菴なる結び自然屋軒と號し風流を楽しみて常ふ一節切なる
頼て老なる狼ふ閑居幽邃ふして西の方ふ天柱峯巒へ東の方ふ吐月嶺
の清澄鮮ふして座中に水なる湛ふされと七星沈とふ曽て座なれ風
色宗長の好ふして座造の法なる洩さ老松枝垂く風の音濃
ふ永正元年初くに廬ふ住ふ附

山櫻ちるふ色流ふの春こそ哀　宗長

終ふ享禄五年壬辰三月六日八十五歳ふして寂ぬ寺ふ墳あり近隣
に騒人懐舊なる石ふ彫く建ぬ半ばし書院ふ什寶あり宗長
持念なる大悲なる像人麿なる画なる蘆屋釜一節切を箱銘なる猿曼
とふ連歌百韻同新式俱ふ宗長の自筆同影像を狩野秀
信の筆宗祇法師の彩なる毒山百助成昭なる筆ふされでなくなる風雅の
名蹟なれでなくなる旅人道なる枉くなる古なる暴ひ英風を欽し嘆息な
少もなくなる多ひり

嘯月亭　藁品川の支流なる波川とふ橋の西なる右へ入れる小野
茅師堂なる波川寺の書院なる嘯月亭ふ富士山屋中ふ
風絲直妙の奇なるり
鮮なる又安部川を渡る旅人眼下ふ遊りて

手紙古驛　なる紙川の名岩くひうい驛ふして東鑑平家なる伝なる
續古　奇なる紙ふ為ふ

富士紀行　なくなる紙なる紙なる紙なる為と出る白浪　九条内大臣

旅人なる紙なる紙なる駒も足なくなくいそぐ朝立　竟孝法印

子孫遺蹟　なる紙ふありとふひう中將重衡囚れ鎌倉ふなる
なる紙の長者が娘千寿なる右大將頼朝なる添く癒うさなくなくなる
愛せし少將とふ妓もなくなる仏門ふ付れしし又なる紙の人なる
平家　中將重衡守護の武士ふ宣ひなるなる物も足今なる女房ふ優なり
なるとのなる名とばなるとふなるなるんと向なるなる物なる申なるなるあれい
なる紙なる長者なる娘なる作なる眉目姿心操も優ふなりなるなるなるなるなる

二三箇年い伯殿ふ召置れく伯名をば千寿おと申をゆゆべ雨
おゝ降てよ彼の物寂しげなる折柴琴琵琶琴を持せて参らう中略
角て夜も漸更くゝ公れもむまくにた邦思わぶゝ吾妻ふもかゝる優
なる人の有るよ其伯中ゆても今一聲と宣へば千寿前室て一樹の
陰ふ寄り密同じ流れ紙結ぶも皆是先の世の契とゆふ白拍子紙
紙ふ面白う親ふ成れで三位中将も燈籠して教ふ虞氏が
涙といふ朗詠紙捨せられる中略其後中将南都へ渡され斬れ
ゆひぬと聞へ一ゝ千ゆ涙ゆい中ゝ物ゆひれ程とゆ成ふ成ん軈て
様ゆとゆ濃墨染ふ窶れ果て信濃国善光寺ふ行ひ澄ゝゝゆの
後世ふ菩提と弔ひ侍りゆ我をあられ給へ

手紙の原合戦 建武二年十二月新田義貞矢剣鷺坂の戦ひ打勝
午の刻れ時ゝ西の下りまで十七度すでぞ戦ひ侍ふ入れ乱れて敵
味方芝ふ人馬紙休先に紙倒ゝ無火紙焼初め月雲ふ隠れゝ夜
陣ふ入れ乱れ義貞の方ゝ兎竟の射ふ紙をぐゝ敵の陣ゝ敵の
陣ふ和ゝゝ後陣ふ敵の中ゝ雨のふるごゝゝ矢

と捨射ゝ名る投義の旗ふ紙ふ名ゝ紙ゝ紙ゝ名る矢あゝ
名の芝ゆ命紙名ゝ勇士ゆ是いゝ名る中ぞかゝせゝとえゝ
名ゝ勢ふ一ゝ名ゝ鎌倉ゝ義貞攻ゝ名る中
時ゝ田義貞揚ふ参ゝ鎌倉まで攻ゝ名るば足利勢ゝゝゝ
名ゝとゝ名ゝ伊豆の国府ふ逗留ゝ中敵ふ勢ゝゝ
ゝ天運ゝゝ名ゝ残念ある中ゝ

古枯杜 安部川の上薬師川の五山ふ
森の中ふ八幡宮立せゆ
森名ゝ名ゝゝの歌

新古今 清住ぬゝ川紙ふ人の秋ゝ紙ふ身をこがれ杜ゝ歌 定家
須拾 秋ゝ紙ゝ名ゝふと月ゝゝ風の杜ゝ樹ゝ名ゝ 正三位知家
新後拾 人ゝれぬ百ゝ名ゝれ国ふ我身をこがれ乃歌ゝ名ゝ 僧人ゝ法
新續古 ゝ須ゝ名ゝゝ時ゝ名ゝ紙ゝ名ゝ風のゝゝゝゝ 雅永朝臣
玉木 ゆゝゝゝて今ゝゝゝゝゝ秋の色ゝゝゝゝ杜 安部門院 高倉
拾遺玉葉 ゝゝゝのゝゝ秋ゝゝゝゝゝゝ名ゝゝゝ 定家
後撰 こがれゝゝゝゝゝゝゝゝ人のゝゝ紙ゝ生ゝゝゝ 僧金沢
東紀行 ゝ邦川ゝ渡ゝ西ゝゝ東流ゝゝ名ゝ杜ゝ栗ゝゝゝゝゝ名高紀名所

安部川

番子ひとりの
道中かぶとを
担ぎかぶり
駄賃
馬吓要の
ちろ〳〵かぶ
のりて
道中々
四十八ぢの
外れ
深川足
班吓

建穂神社 古枯義のかたはらにあり延喜式内今馬鳴明神と称して建穂寺の鎮守とす東鑑にみゆ

瑞祥山建穂寺菩提樹院 建穂にあり真言宗本尊千手観音は行基の作也のうち七躰作りなり其一躰也 天武帝白鳳十三年に道昭法師の開基なり当山の縁起勝躰にして遠近これを尊ぶ

丙辰紀行 此寺をむかし役行者の草創せし所なりといひはべるとかや中比より俗家の者移り居て今にいたりはべるとあり

此地元来法界宮　水雲心性似虚空
吟眸所不知暮　石径霜深古寺楓　羅山

用宗古城 古枯義の西ひがしにありむかしは持舟城と書く天正七年甲州方三浦兵部向井伊賀守籠る同年九月十九日松平周防守康忠牧野右馬允康成馳向つて攻落とす此西に日本坂山にて織れぞ花澤の古城花沢観音堂あり當国の虚空蔵へ行道あり

繁山 此所にあり曹洞の禅刹あり大窪山徳願寺といふ坂路五町也これを方よりあり本尊千手観音は行基の作七躰の其一体也

安部川 水源は甲斐ノ白根といふ上は二流にて丸子の方にて藁科川といふ駿府の方を安部川といふ八町斗り上にて二流會合して一街道にかゝるは一流となる此地安部郡なり由へ熱名紙安部川といふは京より盆山石出る駿府の町にて賣ふに上藁科村は京師東福寺の開山聖一国師の出誕の所なり今に後裔あり近年国師五百年法会を上京せりといふ此川大井川に及ばずといへども渡りの大河にて満水の時は川止ありて旅人の難儀とす東川端に弥勒茶屋とて安部川餅の名物也

駿府 駿河

江尻まで弐里廿七町今の府中はむかしの国府也和名抄云国府は在安倍郡云云当城の初は東海道駅路鈴にみえたれぞ

万葉
佐可故要氏阿倍乃田能毛尓為流多豆乃
等毛思吉佐美波安須左倍母我毛

拾遺
兼盛駿河にまかりて侍りける時馬の餞し侍るとて
われ独かへらせる橋もなきものといくそたびにか忘るべき　源順

続古今
兼盛駿河にまかりて侍りけるにつかはしける
あふさかは花田に見ゆる浦波かくて老のわかれにかゝるとの名　清原元輔

まま
さらへとる安倍の田面むら雲坂まで帰るらんとても　中務卿親王

宝治百首
山風に道行く雲も坂までの田面に帰るかりがね　従二位頼氏

阿倍市 今の府中をいふ名物は竹細工 籐細工 籃鮫細工 懐中練茶 芝川海苔 盆山石 鉢植の樹木 紙細工 紙合羽
其外いろいろあり府下にしく都會の商人多し

散木
君かこゝろやかひふかまなほ阿倍の市にちる　俊頼朝臣

新続古今
いとゞしくあへの市人さへぞ坂まで夕まちの空　民部卿為明

五百番
なほ行きてあへの市路にたつ人はいかに今夜も　中宮権大夫家方

賤機山 府中浅間社の神山也風土記云青葉岡と号るといふ古跡多し

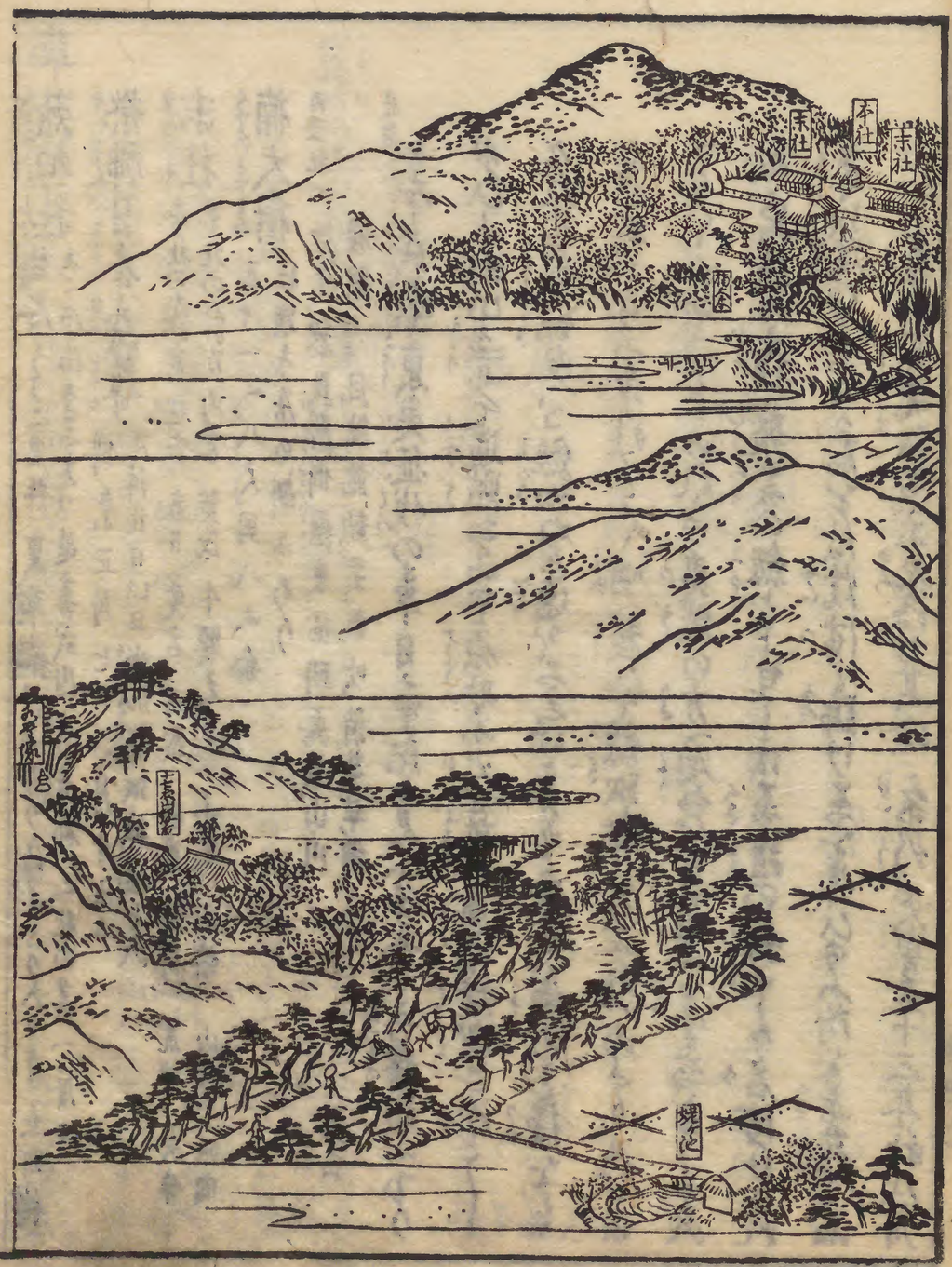
今弦うれば書の夜波をりかそてもづとと山小春はとふ
風雅　後法性寺入道　大政大臣
あら磯なれもつれてさみれなどと日ふ変れめやとる春のうえひを
新拾遺　正三位知家
いつのるふもとのなと山れ初しくれ深てをみぢれ綿とるくん
拾玉　正三位成國
紅葉ちる滝なと山のさとしくれ絶とそやはま波をくん
玉川百首　大僧正慈鎮
散しくるもと川撥山をみぢ葉波ちけ花ふとれる梅とそ香
後京極殿

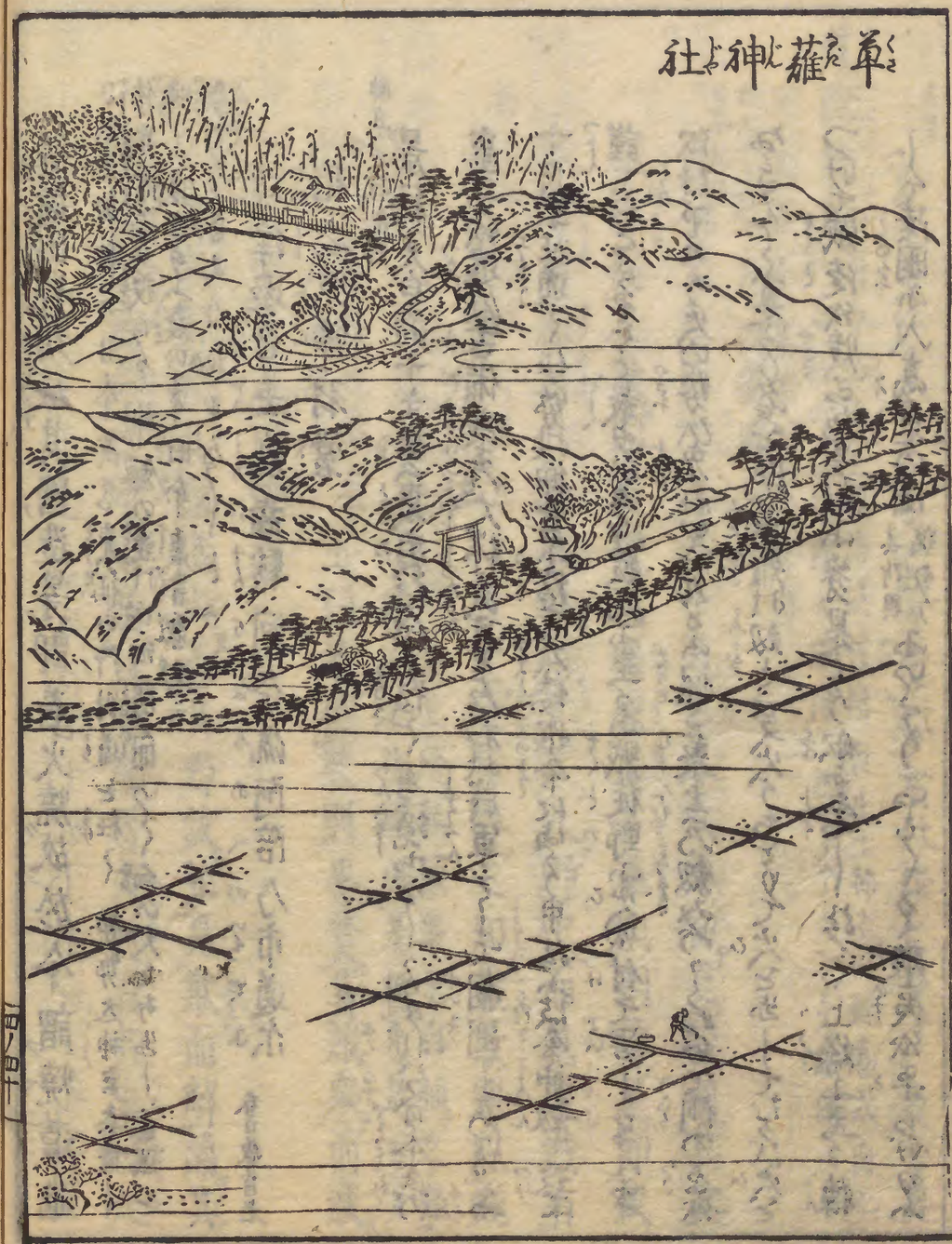
撥山の藤ふあり毎府内生土神とん
例祭四月初申日十一月同日
家集
もとのなと昔ら花の神垣ハ春ふやくくく光そやくん
源氏真
祭神木花開耶姫命　左瓊々杵尊　右萬撥姫命
奈吾屋祠　本社の例あり　祭神大山祇命

撥れ山もうとふ人ぬ春ぶ代ふ及くくまるかりれ松風
源水尾院
貝原益軒吾妻路記云富士濱間の新宮ハ延喜年中富士の本宮
ハ社ハ勧請ハ本社二ふ山ふ穴ありてそこ向ふ撥山ふ社ふ向ふ
山の宮ふ檀百四級あり同所ふ社ふ天狗山ふ穴ありそこ向ふ
ふ社の宮ハ大天狗ふ大社ふ日本ふ神社ハ天狗ふ年
日光ハ第一とハ濱間ハ第二とハふ社宮ハ新宮左ハ熱社
宮内とくくあくくと書り

圓山　撥撥山の藤ふあり福田寺とふ撥の記云慶長五年の
頃初将軍家ひちふ入くせのひ寺師ふ山ふ似くるとて尊撥めり
まの高とと九山ちれるれの年貴と勢とある秋れ秋の月
流之年　寺ふあり溪川の清泉ふ
別當社　府中西の方ふあり一説云延喜式内大歳御祖神社是ふそ
慕示集　風土記ふ當の宮あり
弥ふ年やまのとくくと山のとくくと旅行れ春ふけて天　太田道灌
清水　府中安東村ふあり慶長ふ中京師清水寺ふ移ふ本尊
ふ記ふ記ふ伝都の俗ふ脇士勝軍地蔵毘沙門天ふ
一山ふ楼閣弥生の桜花ふ幽艶ふり
名産河陪菜　府中の小二里許足久保ふり出る菜くふ江戸中ふ用ふ
上方宇治信樂ふ類ふ
足久保観音　足久保村法明寺ふあり山ふ曹洞の禅刹ふ本尊観音ハ
大伝正行基ふ作ふ其身一ふ其民門安ふ大
木の捕ふり里人ふれを伐ふれ基ふ
ふれ霊木ふる事ふ伝ふ
則捕の行ふれとふ七体の観音ふ告ふれハ
捕の片波の捕今ふ繁茂ふ
麻撥山　府中の小の方ふ里許
一説ふ相模国とふ
駿河の海や花橘ふ香の匂ひ　とそふ

名字ヲ
称とゝふのきゝて山ふかるゆゑ本々ゆみちの海ゝ
燒津神社府中の南二理海濱燒津社土神と云延喜式内ノ名神の益頭郡ニ燒津の郷多くしゝ燒津ハ日本紀ニ万葉集等ニ見ヘタリ
古事記ニ相模國と云
日本紀ニ景行天皇四十年冬十月日本武尊初至駿河其處賊陽從之欺曰是野也麋鹿甚多氣如朝霧足如茂林臨而應狩日本武尊信其言入野中而覓獸賊有殺王之情王謂日本武尊也放火燒其野王知被欺則以燧出火之向燒而得免云王所佩劔叢雲自抽之薙撫王之傍草因是得免故号其劔曰草薙也叢雲王曰殆被欺則悉焚其賊衆而滅此云茂羅玖毛之故号其處曰燒津
古事記ニ入坐其野仍其國造火着其野故知見欺而解開其嫉倭比賣命之所給嚢口而見者火打有其裏於是先以其御刀苅撥草以其火打而打出火着向火而燒退還出皆切滅其國造等即着火燒故於今謂燒遣也
日本紀ニ秘鈔云日本武尊東征の帰時道を枉て伊勢太神宮參禮し奏賊を滅し退き申し嚢の中旧本に嚢書獻文云
万葉ニ燒津邊吾去鹿齒駿河奈流阿陪乃市道尓春日藏首老
相之児等羽賞
神皇正統紀ニ景行天皇四十年冬東夷不服ク多境内ハ又日本武の
皇子征遣ハ吉備武彦大伴武日を右ハ將軍として相副しめ給ふ
十月ふ枉道く伊勢ハ神宮ふ詣て大倭姫命に逢ひ申給ふ時命神劔を授て
謹て拜ていとまを教ひらる駿河ふ至るふ賊徒野ふ火ふ付て害しなん中
ハ対まをり火の勢ひ免れがたくるふ佩る叢雲乃劔みづからぬけて側の草ハ
ゆくさきふ是より名を改て草薙ハ劔と云又火うちをして火を出してむかへ火を
つけて賊徒ハ燒死ぬ是より船ふ乗是より船ふ乗上総ふ至り傳
じて陸國ふ入高見の國其所異説あり





国立公文書館
National Archives of Japan

草薙神社 駿河国二里許東草薙村ニあり 駿遠国ニ入る半五町 [illegible]
祭神日本武尊 例祭正月七日六月十五日 九月九日 [illegible] 形解 [illegible] 神佐[illegible]
末社 本社の左社方 住吉 春日 愛宕 白髭 巌島 稲荷 荒神 天神
本社の右社方 内宮 賀茂 牛頭天皇 子安 八幡 山神 [illegible]
楠大樹 高サ一丈八尺周八丈余
社頭ニ店の側ニあり
丙辰紀行 欲爲黎民解倒懸東征到處幾山川 羅山
腰間一劍自蛇龍動雲氣吹消蔓草烟
社傳云 日本武尊東夷征伐の事日本紀ニ見へたる所ハ吾嬬國ニ入り
ゆひしの時ハ海を渡て逆賊ありて原野ニ火を放て尊を焼殺さんとし
給れば尊佩給へる劍を以て草を薙ハらひ火を消し給ふ故ニ草薙と
ちなむ其ハ劍ハ今熱田ニ在り 唱へ殺して劍を以て草を薙ハらひ給ひ
てとくくるぎとなられあ夷賊の方へ烟をなびき尊を惑ハすまじ
叔母倭姫命ハ天叢雲の劍と中ヘセ一ハ草薙の劍ハ今名ばけられ
尊ハ焼むとする所を焼ハ跡ハ跡ハ蹈ハ草を拂ひ給ふ所を草薙と名
づけて尊ハ荒魂ハ[illegible]ふ[illegible]ハ其後 [illegible] 天皇五十三年秋八月

天皇群卿ニ詔して曰ハく日本武尊ハ征せ一國郡ハ巡視せんとて
直ニ車駕ハ東ニ向給ふ伊勢ニハ参り東ニ入て九月廿日ニ鑒輅ハ
停発られ尊ハ神霊ハ鎮ふ其所を名豊原と云ふ初ハ少し西ニ神社あり
しが天正十八年官家ハ命ハ移り再興あり洗川ハ名店ハ東
ニあり毎年九月九日ハ沓形祭とて沓形ハ[illegible]て神佐ハ社家より
奉ハ家ニ配るとあれハ 天皇ハ沓ハ遺し給ふ遺風を都て社頭及び村
中ハ土地ハ玉造の土ハ[illegible]て灰の如し 桜ハ逆徒征伐の時ハ草薙
拂ひ給ふ火ハ[illegible]ハ兆ハ[illegible]とかられる

梶原景時墳 狐塚の東岩原の左の方 梶原山あり [illegible]
言の海刹あり本尊ハ[illegible]
言の其一柱 又嶮路ハ十七八町 [illegible]
あり又名馬 [illegible] 墨駝 [illegible] 景時創 [illegible] 五輪の石塔
今小笹の藁半 [illegible] 馬の [illegible] 小條 [illegible] 町のあり
又山中ニ拘墨馬蹄石 [illegible] 巌水石 [illegible] 巌 [illegible] 国中 [illegible] 風系の地
沙門堂あり [illegible] 小梶原が像七人の牌 [illegible] 山下ニ龍泉ち [illegible] 其外頼朝公ハ室政子の
持念仏の [illegible] 東鑑大意
正治二年正月梶原平三景時ハ国一ノ宮ニ詣とて [illegible] 将軍頼家

くふ憎まれ奉りて子息家村ゆ弘相具し上洛ス駿河ノ国ノ住人関ノ其近所ノ武田七人的と射るとゝゆ集りしが途中ノそ行あひ武者もなく騎ノ武者ノ人々怪こゝ来ル射々ゝふ梶原ハ孤崎ノそ出ノ合セて遂ノ軍ニ成ふる安原小次郎飯田五郎吉香小次郎等ハ所ノ武士先ノ進て戦ひる

梶原景茂ハ討れぬ是ハ国中ノ兵ども大勢あつまりて責ケれば景国景宗則宗連も討死しケる景時宗季宗高叶はじとそひ後の山ノ駆入ケ獲十文字ニ搔切て立ひふる須て其夜ノ暗ノ路ノ迷ひ

つゝ後ノ馬ノ蹄ノ沓ノ掛て家村ノ朽果ケる梶原ハ相山ノ本ノ中ノ

ノ隠ノ伏敵ノ隙ノ計ケるノ頼朝ノ天下ノ治ケるノ時ノ

ノ時ノ昇時ノ浮て威ノ海内ノ耀セる殊ノ安右ノ才智ノ人ノ多ノ

侍大将ノ多ノ平家追討ノ為ノ西海ノ都ノ源廷尉ノ逆櫓ノ争論ノ面目

と矣ノ義経ノ徒ノ多ノ其酬ノ申ケる其ノ廷尉ノ

範頼源家ノ後代ノ為ノ多ノ滅亡ノ多ノ時政ノ見義ノ時

ノ義計ノ

ノ当ノ

人ノ多ノ

ノ基中納言ノ口ノ

待ノ是ノ古ノ

ノ

将軍二代ノ国ノ武勇ノ名ノ得ノ側ノ人ノ

れ

云所ノ討れノ

讃岐ノ法皇廃ノ

所ノ西行

けぶりは中に及びてとどまりたるこそ中はいとこのかれふ覽ゆ

おそれゆむ玉淋れたの名ふ名をぞ名のり　光行

焼ケ池　海老平川北村田畑の中ふあり焼ケ原といふ方三町許れ盆池と其側ふ松樹の古木二株あり里俗ふ云文祿二年二月八日滝氏なるものく妻嫉妬ふ堪へ山池へ身を投て死しぬ其怨霊此池ふ立寄焼くしとよべば涌上りて今ふ至るまでの人あり又焼甲斐なしといへば涌ふ高く湧沸して泡を出す按ずるに此説血乃水脈此池ふ注ぐ歟

波田圃　駿河有駿ふ近き堀湯

焼ケ池　の西羅山先生の詩あり

摂州名所圖會　ふ出せり

有度渓　有度の郡の海渓ふいと神往の前ふ至るまで称有度渓といふ

新古今

うと渓ふ宇ゆくれみやはそとはるん浪のよるく音ふそなる　後鳥羽院

新勅撰

いつと形く変せるぞ有度渓ふてくも人の成まさる式　相模

玉葉集　駿河ちふ国ふ久しうすれば

めくーしふもるぐれのことひもりるとど渓のうくく水ふん　大中臣能宣

有度渓ふうゆ紀ゆあ〜ふ田子乃浦ふ名ふんを名ふ〜ふぞ　平忠盛

久能山　駿府東南二里ふあり當山の開基ハ古人の紀行貝原益軒吾嬬記羅山子の丙辰紀行等ふ見へたれをまくふ略ん

山家

久能の山ちふ月と見ふまさるく旅ふれやさやふ見ふとと見ふまさも　西行法師

龍樂記

あの満とりてら渓光ふまにありてくまでぬる紅ふみ中ふ　源左大臣

丙辰紀行　寂然　長隱　久能宮明德惟馨神國風

東應海通記　億兆　小臣望不及帝鄉路遠白雲中　羅山

宇度ふ渓とるれば浪の吉風の多ふ狂ふ伝ふ心渓の東ふ小蓋地の山寺あり四方たくそれ四明天台乃まるくり堂閣繁昌しく

本山中堂ふ儀式ふとり一乗續紐の舞ゆ十二週中に安絶る事なく

安居一夏乃ふ採花汲ふ水ふ修する所ハ中道の教法傷俊を考験の願ふ渡しる利する所を下立ふ尼生帰依と遠近ふ

ふきうひふ天伽藍ふ名ふ宇ふ基菩薩の建立ふ本の風情しく本ふ

實ふ見れば現世音とゆ補陀洛山の聖容出現の月あ紀ふうあり

大ふ仏法興隆ふ紀り数百箇所ふ星漢霜ふうふ僧俗止住ふみ

三百餘宇ふ禅房叢林ふ立ふ乗船の石神山腰ふ獲て悪障ふ

せぎ天形の木容い寺内ふ納りて若業をゆん千手祝者の山ふり

石船ふ寄くしは地ふとうあんとう甚身若神と成く山路の大坂ふ石船
護法と号て彼海岸山れふ眼を南方より少へ飛て有縁ふて山ふ導
宇度浜れ品天面ふ地ふ得く舞乗ふ波山浜ふ海ゑ乗り むう 稲河
たまといふ人天人の浜変れ下に楽ふちゑて舞々ふ波ふて まろのび舞
々う天人の見る波ふて色のでくふ飛で雲ふ隠ふ々りそ係ふ波ふれた
一面形と落せり左まれふ波とうて寺れ寶物とんより甚寺ふ舞楽
ふ左ちゑて法會ふ波ふ地ふ左ちゑ左ゑ子孫舞人氏ふて二月十二日常楽
會とくち中れ大学ふ其後天人海り週雲ふ其の花れ左ふ左ふ飛でまろ
曲風い茅月の賀と安ゆとりくふ浜ふ波れ松ふ雅琴ふてくふ波ふ川
づゑあり天人の楽ふ波今安ふ波ふ

独ふりてはをとあがたまふ波ふ波ふ波ふ波ふのあとの左ら室

補陀洛山久能寺 有度郡村松村ふあり江尻駅より北町 新義真言宗 来迎院と号ふ坊舎十宇

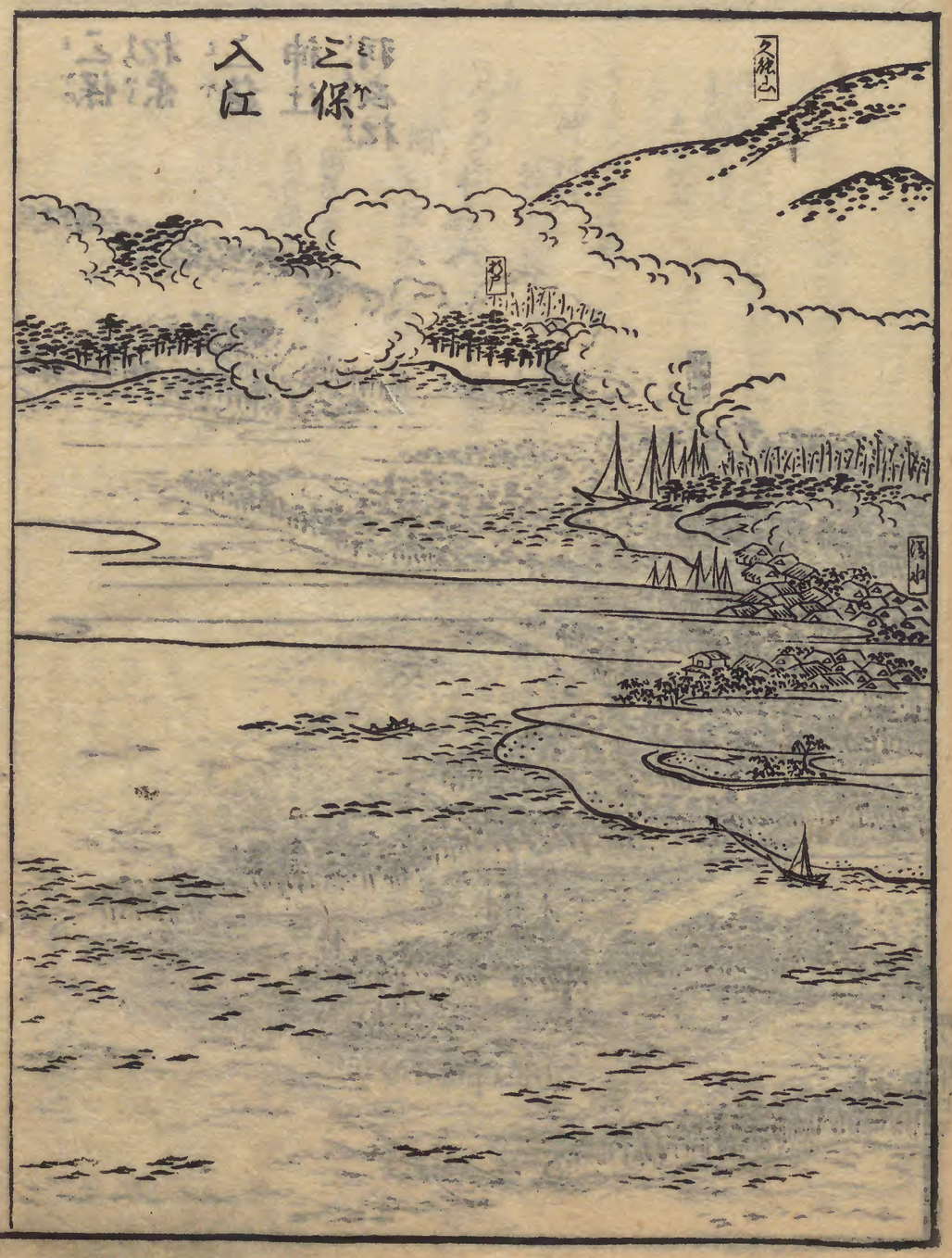
本尊千手観音 行基僧正の作 感得の尊像 御中ふ蔵む

境内ふ茶師堂 鐵魔堂 鐵宇ふ十二所 撥魂ふ多り 其外 稲荷祠 荒神祠 鐘楼 二王門 地蔵堂等 あり

拾れ当山ゑ 推古天皇御宇久能忠仁卿駿ふの国守ふ任ド 当国ふ
下ゑめる射田猟しゑ深山ふ入る所ふ老杉れ株ふり金色の光あり 怪ど
あゑしゑあれを探うえゑふ南浮檀金長五寸拝のゑ観世音ふ得りふ特
のゑ膳ふ絶ド 弗仏院を営て安ゑ一ちり百町の田園ふ喜捨して寺庵
とふある夜八旬の老僧香深の袈裟ふ掛く久能れ松上ふ立く 我い補陀
洛山の浄土より度元生の為ふ来ふ小衣く 彩現ゑといひ絶ふて 忽覺む故ふ山
號ふ補陀洛山といひ本願の名ふ波ふて久能寺とゑく 厥后百四十年ふ歴て
耆老七年大僧正ふ基菩薩海内巡国の砌ふ立ふ金像と胸中に
蔵てみづからゑ大悲れ像を彫布して安ふ今の本尊是ふ当寺ふ見京
の地ふして士峯ふ鮮ふして愛鷹箱根二子山近くふ落雷の沢ふ田子浦れ
地電清見関清水れ浜入江と走る真帆片帆漁の舟所くふちいさく
こ嶺の松原真妙ふして出海と八ッ頭といふ波ふ眺ゑの座一ゑ

富士山
愛宕山
清見
長崎山
陸奥八ッ瀬
長崎
長崎小淵

村松
久能寺
駿陽
張安画



久能寺什物

宋相御影 二幅八幡宮弘法寺所蔵之 弘法大師筆

○龍王面 天竺釋尊の像 ひまの面なり云

○法華経廿八品 弓羽院待賢門院筆之其外宋合書

○翁の面 弘法大師作

○笛 源義経所持銘薄墨 中村式部少輔保綱造

○廿五條袈裟 聖一國師入唐の後南山小細谷

其外弘法大師筆 恵心僧都筆 縁会啓書記筆 名舟画多あり

丙辰紀行

久能山の狀とゝゝふ海岸孤絶の所也 観音老人堅坐の地なれば補陀

洛山とも申ゝ三里餘り東ふちあり久能寺とゝゝ聖一國師藁科乃

産也ゝ山寺荒廃法師を師ゝ一名教を呼びしゝ入宋其後達摩宗

弘伝ゝ東福寺其筆一紙ゝり其の人物も久能の尓長老と称じゝる

宋より渡ゝ瑪瑙の羯鼓と此寺へ送ゝれゝ又源頼朝も落墨と

いゝる横笛を寄進せゝれゝゝ故ふかゝりゝるとゝん

寺僧の書をゝるゝゝ勧進帳ありゝ紙ゝ伝りしふりゝ

ゝんありゝる其外 推古天皇其御時革創せゝ事ゝ

疑ゝゝゝゝばよゝゝゝゝとゝゝんゝ忘れゝゝ

遠尋幽寺到斜陽過客居僧談両忘

身是此山清浄色何求無垢在南方

羅山

二保の松原
二穂神社
羽衣松
羽衣松
打出生松

清涼殿
奏盤所
色紙形ふ
そもそも二保の
仲はれ
ふるめかしや
浦の松原
閑院一品太宰帥
典仁親王
天満宮
二保

三保松原 三穂或い作穂とも書く 三保の浦 三穂崎等 古歌多し

駿府より武里東近今村より入江廿町舟ゆて三保、松原へ着く又陸地八清水より海岸を廻る拾町ばかり三保の村を過ぎて三保へ到る行程三里半餘三穂々ふもとより拾里餘ある洲崎とし

拾ばかり三保の洲崎まで廿四町四十二間山間ふ字多し 見晴 羽衣渓 洲崎 八つ頭 村より洲崎まで廿四町四十二間山間ふ字多し 見晴 羽衣渓 洲崎 八つ頭 波瀬渓 成女尾 宇津久呂等し 風早浦 三穂浦の一名 万葉 風早の三穂乃浦廻乎榜舟之船人動浪立良下

續古 忘れをよ清見が関の波まくら夢てだに乃浦松 中務卿親王

玉葉 ささなみや三穂の浦松 清見潟 羽衣

風雅 清見がた三穂の松山寺に暮初て入日移るみほの松原 後京極摂政

玉葉 紀を見へて浪路の雪や晴ふらん春ふかのまる三保の浦松 平宗宣

新千載 絶えものこの世は焼てふ風ふれみほのうらはにふり立つ 左京大夫信実

亀山院七百首 志ほ風ふかなり晴くみほの崎松原ゆきもまる月哉 親教

百首歌合 清見がた三穂の浦の月哉 中務卿親王

紀行 三穂が崎みのるる桜かくれなどさかりまさりの松原 冷泉為村

御穂神社 御穂松原の中にあり 延喜式内 廬原郡三座の其一也

三保村生土神 例祭十一月中申日 御穂は媛命 三穂津姫命 大己貴命

祭神 風土記云御穂津彦命 御穂は媛命 三穂津姫命 大己貴命

遷座 三穂の神と名づく 牛頭天王祠 本社の西にあり 末社に神明 稲荷

相生松 本社の中にあり 古楠 相生松の中にあり 二神出雲国より遷座し申ふ也

羽衣松 御穂社の東南に八町四十間を隔てしかり 古松 枝葉あり

本石造の祠あり 風土記に三穂の離宮羽車陵と崇む 御穂の離宮羽車陵と称し土人

羽衣伝説 天人降りて舞しと 漁夫ひろひ

好し 半 彎曲 ありて世の志の

羽車に乗て遠く求めゆく其羽車紙

の半 舎せ 羽衣 羽車の半 源順の竹取物語より 吾嬬記 奥原

羽衣 羽車の半 天人降り車に乗て天人

内侍所 西廂に 御神宝 紙 書 古歌 ふと

御羽車 歌 書 の器

續拾遺 式部 古浦 貢業 伊豫 ちふ侍る時 彼国の

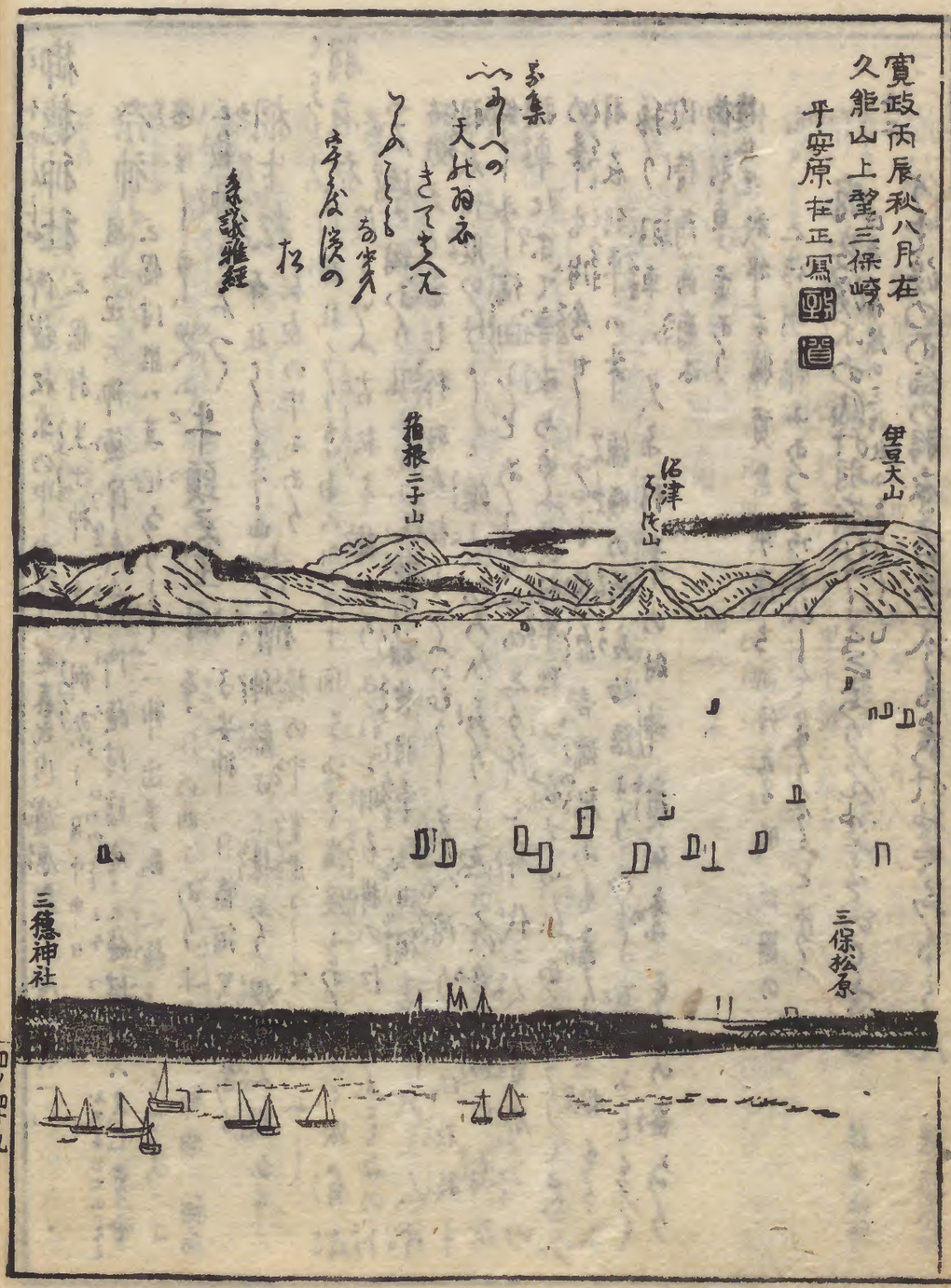
三位 明神 あつまはてしてまりなると 後

土二

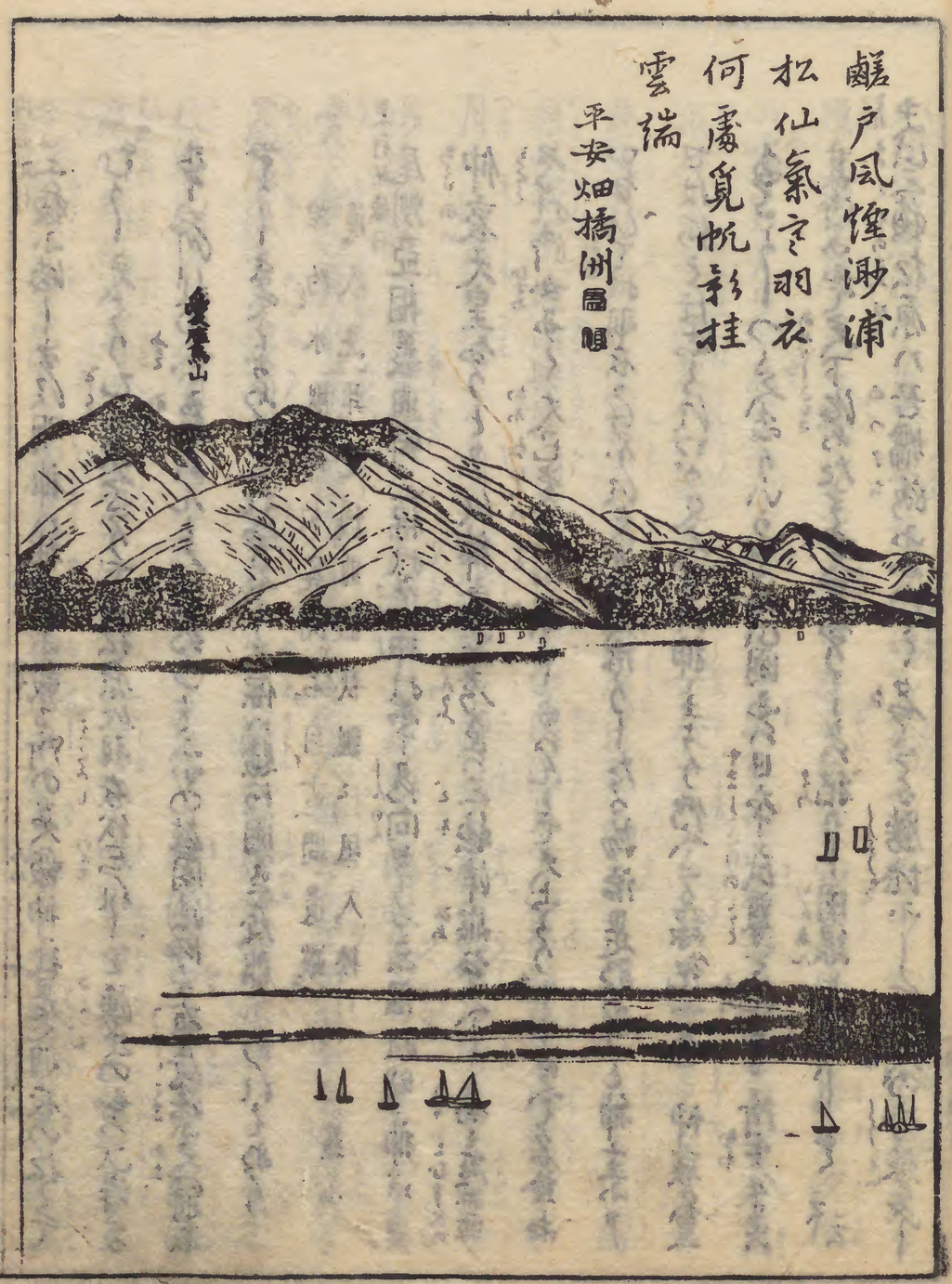
有度渓ふ波の羽衣むつ三穂の浦 能因法師

うせ渓のあ波の羽衣去ぬ今も春は神やふるらん 従二位家隆

寛政丙辰秋八月在
久能山上望三保崎
平安原在正寫



鹿戸風煙渺浦
松仙氣之羽衣
何處見帆影桂
雲端
平安畑橋洲圖順



丙辰紀行

三穂に詣しまへは明神は神籍に載る所の御穂神社是也羽衣の松とて
むかし天より乙女のくだりて此松原に羽衣を忘れしを漁者のとりて得たる
事は此州の文にもあらんと人のあやしむたしかにかの能因法師か有度浜に天の羽衣
きたりとよめるはこれなるべし三保は駿河国有度郡にあれとも

東行紀録曰

綽約氷肌神女容　聞名自古問遺蹤
漁人洗耳是何曲　仙袂飄々風入松　羅山

尾州亞相義直卿三保の祭神の事尋させらる三保の明神は
仲哀天皇なりとや此神書を考まへ三穂津姫なるへし高産霊
尊の御女にて大己貴尊に嫁しまゐらんとて天上より下し給へる名残也
かならひて此羽衣うけかへは天女の天降りしたる物語是なりと神主にや
せは何とはきかれけれ文人宮の神主より伝へる縁起一巻　仲哀天皇
なるよしつたへありいのちを此国の日本武尊を祀りまつる所多くまつは
其神子にて天下治めたまふ天皇なりしかは祀りも因縁も有べしやと云
まづ三穂松原は吾嬬路におのつく名たたる勝地にして古人の秀詠多し

久能宇度浜より東に連りたる出嶋くま其間七里余にして洲浜の名ある
短きあり広きあり狭きあり中々数百株の松の緑は海中に枝葉汐風
に吹さらされ高きあり低きあり直なるあり曲れるありて奇景窮
なくして三保の美人紅粉を粧ひて一度に笑るかことし遥に東の方を
見渡せは名にしをふ富士の高根愛鷹の翠巒おもしろく浮嶋か原吉原蒲
原の驛薩埵山興津川の流れ清見か関清見寺の鐘の声も悠揚として
月に清霜に冴より田子の浦端を漕舟も松の梢を走るかと疑ふ
少しの清水の漾浪しく入船あり出船あり漁の家行をならへて奥
愛る鵆の囂しく南は滄海洋々として大鵬三千里の羽をうつ傍あり
荒磯浪に玉藻刈りみの蚫とる海士潮くむ海女みな世をわたる業之
其のさまいかにあはれならざるはなし洲浜の中に家あり渡瀬
浜八頭の洲崎成表尻宇津久呂貝嶋なとよふ其中央に三穂神社立
まふ社頭は神さびて鳥居の額は羅山子の書れしとそ羽衣の浜には羽衣

れ松蔭田舟ゆきいとあはれなる海辺に神社の什寶ふ天羽衣ありと
納言とのたまひし天人より伝りしとや漁夫なり天人ふ羽衣ぬぎ
裳羽衣の曲を奉し七寶充満れ寶殿庭にたると廻へたまふあり
あらん想ひて此松原い蘆く龍々さして紀の岩代の結び松ふ倣ひて枝に繞
て結びとるもとりれいふ祈願をやなぐつるし松の下に芽出生繁て
松葉をく又肉捉寄もとりもやむしし松原ふ登馬なり今も其例遺り
て、正五九月れ十六日中を近郷れ馬沢を神あふ繋ぐ抑れ勝地い
むしとり風流れ名ぞ多ふ有て士峰沢畫と三保乃松原沢圖さて伝
ふり然れど三國の名山ふ相對の名勝なるべし

駿河 江尻

奥津まで七里三町、中古江尻城あり甲州山縣三郎高或ハ穴山
梅雪もとく小幡ら甲加没高の後城廢せり
紀行

いとく日高く江尻れ駅ふはくく人の業内ふ後ら勝てちる紀淚ふ
いと清ん流ぬし沢ふるあいまさたるひとのふれ三保れ松ばら
見渡を所々沢折白ふ

冨士見むと汐三川渓辺のまる日ふ石立出て松のけとゆく　玲泉寺村々

清見ぐさとせ来る涙れ河とりのるとふんくてるれ冨士の根、
岩瑞山

岩瑞山たるくこふとそれれば中程をくまりふ友る秀、
三保ゞ海本れたる水まのれ紙ときみくまくいこのる松ばら

瀬名川

江尻の駅中巴川の上流し西奈ハ郷名みくく和名抄ふ出今瀬名村より
川上ふ〜浅畑の沼し瀬名川と後合〜巴川といひ橋沢見後しいく
ます

せみ川や早瀬をくく沢水ふいも恋つる涙るるん　第八卷三百　高歌

庵原

あり駿州志ふ國後郡とあるく郡とあるく非しむ〜ハ郡縣沢國と
漢る例ふ一郡波國廣田函長田函
城國の國　新千載

清見潟関より外も出ぬるのれさそ濤の色そ成れ　富士　納言有光

新後撰

清見ぐさ打いそんれと庵原のみほのおきつ川ハ波ちろ　ちはや　民部卿言氏

ます

つしも又ゆり孫むもふ庵原れ清見ふ月もかくれ伝　遠三佐　沙弥

蘆嵜

いさき　庵原郡の畧刻　ゆりぐし　郡〜庵原郡の浦沢いく
又　嵜　續後撰

いと濃のさぬ美の浜れうれのれし袖さへぬん　源俊頼

まま　磯浜のこゑにれ浜の友ちどり行かみ川し海に夢さめく之　藤原定氏

角田川

現存六帖　風吹ば波こえて磯浜にさゞなみの浜に舟もかよはで　前大納言為家

すみだ川　唐崎の松の辺り清見寺のかしこ西の方今旗お川といふ土人云足利尊氏藤據山合戦の時此川にて旗を押立しよりあづくとて伊勢物語の角田川は武蔵下総の境にして江戸にて又大和にも角田川あり大和名所圖會にみへ澄月か搭せり紀伊にもこれは大和紀伊の湖淵あれど故わかるあるべし

井蛙抄　都名にふもあれや唐崎の角田川原も名こそ絶かはる　定家

まま　唐原やたちこゆる原の礒松なびく見わたせばおかなぬ浦かな　源家長

清見関

家集　きよみ川の風立ても行かぬ夢も清見が礒待かなし　源氏真

清見関　村老云関の古跡は今の清見寺の門前と云り八雲御抄には駿河の海邊冨士の麓と書かに

詞花　よもすがらふじの高根に雲消て清見が関に澄る月かけ　左京大夫顕輔

千載　清見がた関にとまりて行舟を嵐のさそふ木葉なりけり　大納言實房

續古今　忘れずよ清見が関の波まより霞て見えし三保乃浦松　中務卿親王

新後撰　清見がた雲もまがはぬ浦風に月をも守る波の関守　前大納言資季

新後撰　関の戸は未だ明ぬらし清見潟あけよりゆる千鳥の声　今上御製

同　きよみがた磯山こえて行舟もいまは関にさはりなきかな　前中納言有房

同　さればなる身をも任せぬ清見が関は月をとどめて　僧正行意

風雅　駒とめて暫し見るも清見潟波ぞ立そふ波の関守　法橋頼昭

續千載　さやかなる名をば残して清見がた月に関もる秋の夜　中原師直

續後拾　身はなさぬこゝろやらん波の関路なるらん　法橋顕昭

千五百番　わけぬれど波は寄るさだ清見がた関路は尋ねまそとさらふ　従三位保季

草庵　清見潟関こえてくる旅人の見る霞のあて三保の松原　頓阿法師

浄見ヶ崎

今の清見寺のあたり

万葉　廬原乃浄見乃崎乃見保之浦乃寛見乍物念毛奈信　田口益人

清見川

今の唐原川なるべし

まま　清見川いつるみなとにさそはれてうつくふ浦の入海　夜鶴内大臣

清見浦

今の清見寺村といふなるべし此所に名代の膏薬の店茶店あり常に興津鯛甘鯛の店多し浦はみな汐浜なり

夫木
たつさふるの松おりへともなきにかかる月に清見が浦乃秋かせ　千載　大納言有家

清見潟（きよみがた）　今は清見浦なるべし　潟者以瀉寫水ヲ又須也雅也

新古今
ちぎりけむ秋しそれ寄る磯清見がた波にうつしてあらはされ哉　従二位家隆

同
見し人の俤とめよ清見がた袖にせきもる波のかよひ路　参議雅経

風雅
清見がた波をかうしくたび寝まてかかる月をこそ見ん　皇太后宮大夫俊成

新拾遺
清見がた沖の汐路の夕なぎに入日うつらふ三穂の松原　従二位行尹

千首
きよみがた磯うつ波も音絶てちるかふとるる入江のかげ　権大納言為尹

月詣
清見がた波は千里に雲消てさやけくもよする月かげ　後京極摂政前太政大臣

十六夜日記
岩かどにほど清見が関をまてこえし岩こえる波の白き絹をうちきせるやうに見えたるいとおかし
清見潟としふる岩にこととはん波のぬれきぬいく重かさねつ　阿仏
ほどなくくれてそのわたりの海近き里にとまりぬ浦人のしわざにやとなりよりくゆりかかるけぶりいとむつかしき匂ひなれば夜の宿なまぐさしといひし人のことばもおもひ出らる夜もすがら風いとあれて波ただ枕の上にたちさわぐ
ならはずよよそにききこし清見潟荒磯波のかかる寝覚は　阿仏

東関紀行
清見が関も過うくてしばしやすらへば沖は石むらむらしほひにあらはれて波にむせぶ磯の塩屋ほそくに風にけぶりたなびきてものあはれなるべきわざなり朱雀天皇の御時将門といふものあづまにて逆謀起しけれをたいらげんためにうぢの民部卿忠文を使はしけるこの関に至りてとどまりけるが清原の重藤といふ者民部卿に伴ひて軍監と云司にてゆきけるが漁舟火の影寒して浪を焼駅路鈴の声夜山を過といふ唐の歌をながめけれは民部卿涙をながしけりと聞にもあはれに
清見が関とはしらで行人も心ばかりはとめやおくらん　光行

清見嵜
清見寺

千五番
清見ケ
うきゝの浪ハ
やしろ表の
月ハ山の
ゝ海るゝ
ケリ
後成女

清見ケ
海ハ
あらし
あらしと
同し
秋の風
[illegible]

巨鼇山清見興國禪寺求丕院 宇原郡興津清見が関にあり 俗に清見寺といふ 禅宗 派は京師妙心寺の末寺なり

本尊正觀音 座像長三尺 客殿に安ず 当山はむかしは天台宗なり 慶長年中今の宗となる

永世孝享 客殿縁側の狭間に掲る額也 琉人裔孫朝陽の筆

諸佛宅 上と同所にかゝる額之 朝鮮人青螺山人書

皎月長輝清見寺
芳風不断駿河山
客殿にかゝる聯あり 琉人裔孫延翼の筆

足利尊氏公像 客殿本尊の側に安ず 又其側に琉人の牌あり 其書云 琉人求丕院大洋尚公大居士 又山中に此墳あり

客殿畫 獅子に牡丹 狩野探幽の筆

開山堂 当山開基覺聖禪師の像を安ず 世に此禪師の號を和尚といふ むかし此清見浦の漁人丈餘の鯨を漁んとせしに 則法語を授けゆへ 人ゝ忽然と和尚の價をとらずして 寃求め法語を授け給ひ 鯨を放ちて 海底へ遊ぎさりける 頭をふり立光を放ちて 和尚を凡庸の人にあらず 菩薩の化現なりとて 賊多く拋く 此清見寺に再營し 今に長者が浦といふ 寺の西にあり 謠に作れる之井の本に至る 様の住ける跡も此所にありける

護國禪師像 開山の左に安ず 今川義元の伯父也 雪齋長老と号す

自覺聖智禪師像 開山の右に安ず 当山第二世とぞ

龍虎兩軸 書院に掲る 土佐の物也 狩野主馬之助の筆

衝立畫 表紅葉 裏松 狩野古法眼元信筆

石浮屠一基 客殿のおくにあり 山梨氏の碑也 文は 原の駅 沙羅樹下白隱叟撰

同一基 当寺門前にあり 銘に云 處山一居士慶安二己丑年八月十五日生國參州岡崎 爲仕官住北之國田中清左衛門尉長世 云 寺僧云 此人は關ヶ原合戦の時石田光成を捕へし人なりとぞ

夫此禪刹は世に名高く 前は江海渺々として清月禪心を照し 後は山嶺巍々として嘯ゐる猿聲に和し 祖堂の四君樹は朝鮮木にして四時に花を咲 其花形毎々に変れるゆへ此名あり 臥龍梅は客殿のおくにありて 枝の流れ丈餘にして 其側に無縁梅あり 早春の頃は匂ひ芬々として羅浮の夢に近く 芳しうして拂へども去らず 壽陽公主の粧あり 書院乃庭中には九段に落る飛泉ありて 是を九曲泉と名づく 庭のおくに牛石虎石亀石は其形によりて名づく 什寶は國初將軍家の鑾輿清見寺關の兵器四品あり 抓頭抓子捧鉄眉尖刀などの類 其外寶器多くあり 常は清見寺の鐘を聞しとぞ 弁に狸女が縁楼も庫裡の前にあり 此門前は則東海道にして旅行の客萬國の諸侯多くは此寺に駕を停て詩を賦し歌を詠

もるもあり茶店はお裁ゝみな海濱ゆゝして汐汲汐焚竈けぶりいと寂々さ〜〜〜風流しさくいを尋うしろ月は名ゆゑ所ゆゑして須磨赤石を及びさる後邑に謝莊が月の賦ふ白雲空ふ曖〜〜素月天ふ流〜〜し贅せ〜〜〜ゆゑはおとりの事ゆゑ〜〜

清見寺十境　清音閣山門　當山十一世関挾和尚稿

峻嶮高閣倚祇林直對松原十里臨大海風烟連慢卷諸天鐘鼓傍波流鶴邊聲落應真錫霜後月明長者金千歳依然形勝地將令騷客此投箸

將軍石在山峯尊公陣跡淵之濱石古名存苔自新崔嵬沈西三十萬天扶漢運五千人鼓鞳聲合磐城浪旌旆色迷櫻野春維昔將軍茲所憩老松風雨聲

清淨觀

海邊花木五雲興櫻在補陀岸上憑風靜潮音隨梵唄天昏樹色掛龍灯瑤池五佩空中響銀漢仙槎月裡昇坐想人間難可到鷲峯鐘磬度嶮嶸

分境亭在山巔

絶頂樓闌霄漢間清秋此日一憑攀洲前暮色三峯雪樹抄人家四水灣引雨纔分龍爪嶺凌波欲動鷲頭山雄風須賦披衿客不是蘭臺興詎閑

三保

平楚蒼然浮海潮中存古廟畫蕭〻羽衣松掛烟霞色鴨浦波連烏鵲橋日暖千帆如雲點飛四面似山朝夕陽一半漁村兎天樂時聞月裡簫

利生塔　客殿西云北巻壇

湧出瑠璃界塔標落海中攀梯過鳥道卷幔倚龍宮咫尺天城雪烟霞巴水東勝因隨所化色相是真空　觀音堂名

巖腰亭

亭子藤蘿外潮光戶牖間魚龍吹浪出舟楫傍欄還驛樹橫沙月餘霞當目山原眺詩思瘦早晚此占閑

九曲泉　尾中瀑布

九曲懸崖上銀河下碧潭篠樹杪細落芭蕉疑入匡廬岳也攀鳥鵲橋許由不洗耳此地無煩敵

袖子浦

鳶影橫沙晚淚痕袖浦濤蘆花連斥鹵紅樹照林皇江白風頭促月低舟楫高妻其多旅思砧

幷擣綿袍

田子浦

三保從西出正東田子洲江雲分駿豆嶽雪照

春秋山向五原起波連七澤流渙樵風化在猶

春暮紀詠古人韻

今日い清見寺に尊興院をとゝ〜ぬ表れ々波静ふむひふ三保の松原ゆく波りまゆその景いくさ〜ゝり

清風のゆくもたそび清ゆみふ波をくこわの松原　光廣々

悪詩をいちはしとゝ〜んの侠ふ作りて住持ふんをゝれば生〜れて和顔ゆ

絶妙新詩聽更佳推儲酬和隔天涯　大梁和尚

芳聲驚世京花客嘯月吟風伸雅懐

ゆくいくる波ゆ〜めして作ふ前ふめを面ふ付くる作物語ゆてあり

昂奥の發句はらくまれしとあれて

月よんうたゆゆ表れ名清ゆうを　送芳

ゆ春こゆ〜そゆ遠のゆゆ波

うくを濡く波ゆるまでゆをこ居さをゆひてとゝろゆて作涙

名ゆめて今宵い月沢清ゆんで〜〜波をゝ〜歌ゝも

清ゆうゝ一夜いのゝ清乃聖月とゆわゝ世ゆのまゝゆ　玉泉

此紀海い寛永十二年の比二條殿の左相府若公烏丸亞相光廣卿ゆて御使ふ吾妻ゆ都をゆ〜紀行を表のゆけばのゝいゆゆゝ〜

丙辰紀行

清見関を延暦廿頃奥州の逆賊高丸駿河の国まで攻入さの関ふ陣沢

ゝ〜と坂上將軍討破ゝて高丸奥へ退〜半久〜ゝれを語ゝも傳へ清ゝ

沢所寺ゆ事ゆ恵日山乃尓長老聖一國師の弟子開聖さのちとひ〜ゝき

清乃寺と名ばけゝい巨鰲ゝもいゝゝ辺須妙心寺ふ属ゝゝふ空へ清ゝ

経歴巨鰲山入門心自閑禪徒今住寺

函賊昔攻関三保窓襖裏大洋机案間　羅山

起鞭征馬去斜日照人顔

東慮海道記

清見ゝ関沢見れゝ西南い天ゝ海ゝ高低ゝゝふはゝ沢まゝい〜東北

ゝ山と磯ゝ嶮難同ゝく足沢ばまゝゝい盤の下ゝい波の花風ふゆ〜く表の

さゝゝゝく岩ゝゝゝれの色ゝゝ沢舎く岩沢ゝゝれゝ浮ゝの波い表と打

ゝて月のゝゝゝね表ゝ漕流陸ゝ沢い盤石沢道ゝて風の使御ゝ〜ふ吹

てゝく名沢得ゝゝゝ沢ゝも興沢得ゝ耳ふ流ゝ所ゆゝ〜ゝ〜ゝも

貝ふゝけゝゝ耳目乃感ふゝゝゝゝ得ゝい此浦ふゝゝゝ浪ふ洗ゝゝゝく

面ふ通沢見ゝ松風ゝゝ〜ゝ〜ゝ岩柳ふゝゝ〜ゝと表れゝ接花変ゝ

石あり南面の岩布たゝえて所あり むゝ閑ちの布波さうゝるゞ
積りあつふ形りくるぼと角四
吹と雖く清んうゝ凡ワもれ貝へ所らくぶさうれ祭ふ堂
ゆゝくもやゝくるたう清見ちもど独ふゆくる波も

駿河 興津

和名鈔ふ息津と書れ或い奥は又い沖ぼぞも書う由井まと訳里拾六町
ひ道い山水の風景真ぬゆゝて東海道第一の勝地と名高奥津海苔
ぶのゝ猿ひふちち紀岩拾けぬ浪ふと独ちぬれたり 源光行

甲州身延山道 奥津驛 左の方ふ法華題目堂あり是たり身延山への参詣
道も藤まで十三里餘其道法も奥津より完原まで四里
八町万沢まで三里南部まで三里身延山藤まで三里ちゝふ於ゝ諸堂巡
多ゝ日蓮上人真骨寶塔へ詣ゝ奥院まで五拾町 此道ふ諸堂多ゝ奥
院より赤沢村まで五十町赤沢 雲氣川と流り七面山一花表ゆて北
町餘一花表より神楽まで四十町 坂路嶮岨と又江戸より詣もるゆい富士川の
西北岩渕より入る万沢まで六里餘と万沢より身延山まで京江戸芸
ふ同ゝ 衛道と富士川より身延山まで都ゝ十一里ゆり

奥津川 驛の東ふあり又浦田川ともいふ此川瀬ゆて初夏より中秋の沢
まで鮎釣漁もる半ゝ多ゝ至ゝ美味と川の左ふ如綿蓮ふ天何あり
清見ちゝ月ふむゝくるゆゝ川ふ流ちて彩や海ふいづらん 薩摩僧正承法仁永編

明亟
波そそるゝ石ゝ流ふ駒ゝ先て奥津ふ京ふちぞゝ涼まん 法親王

家集

海ふいづるみをといるゞ興津にゝくぶや瀬ゝの狩衣ゝて 泰篠雅経

十六夜
興津の渓ふ歩いづるゝくゝあゝけ月ゆげぞまりさひ出ゝるゆゝ立入
たる所平ゝゆゝし紀はけのとはゝてゝありいゝゝゝれいゝちゆゝゝ
るふ春ゝもも見ゆればはゝゝけもゝゝゝゝ平ふゝゝゝゝ紀はゝゝ
ゝ紀きゝに見るめぞゝ紀ゆゝり拾無ゝびゝ紀ゝゝふゆゝゝる

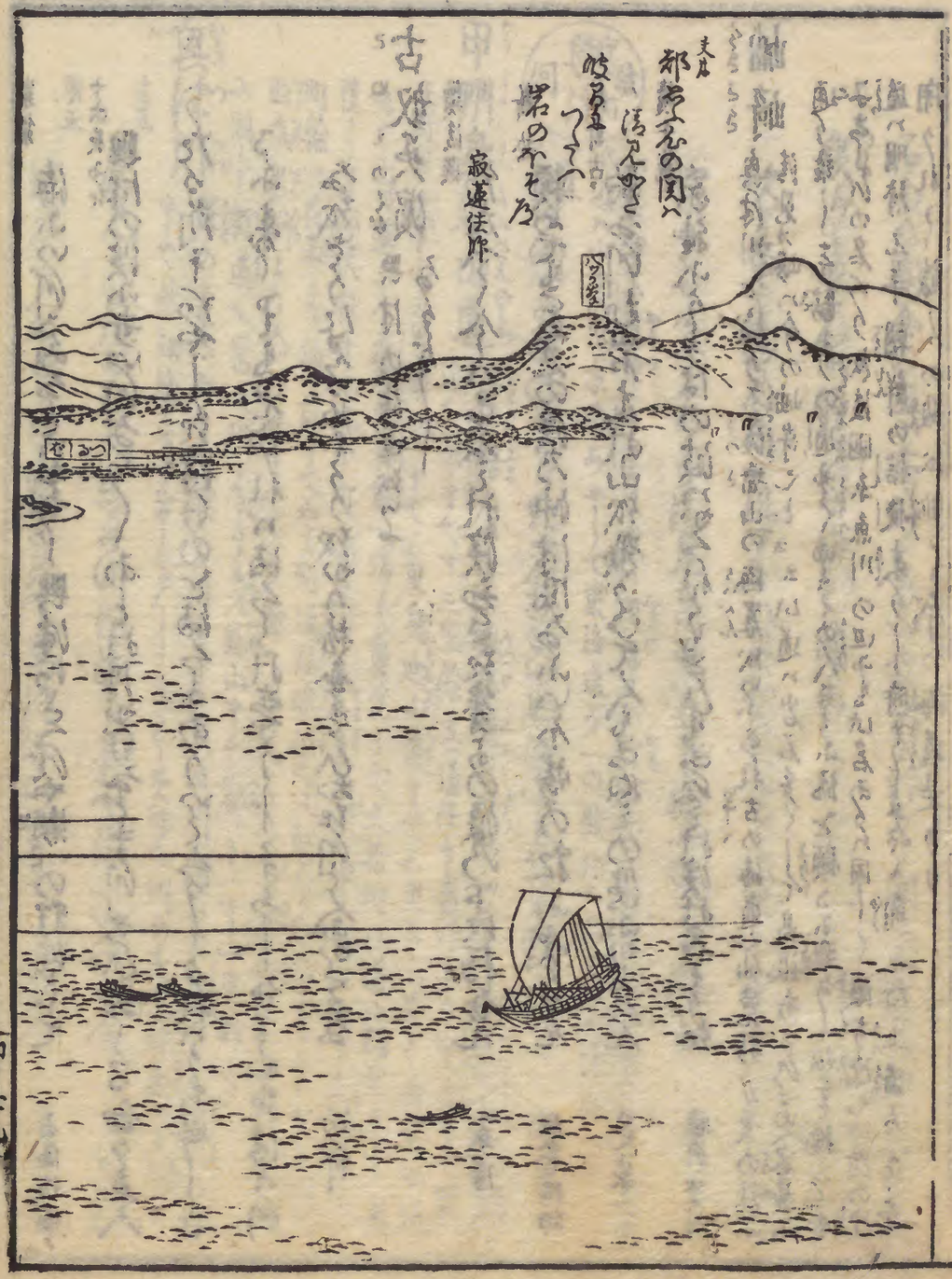
古奴美濱 興津はの海也紀ゝ
ゝゝゝゝ

續後撰
新拾
頼めてもこゝ見の渓乃沖は風ふい不藤の松ふ吹らん 家隆

續新古
駒ゝのゝむ岩木ゝ山紀振ゝて人もゝぬこの渓ふゆゝ待ん 能誉法師

續千載
孤独ふゝゝはの波いかゝれどもひぬこゝ渓ゝ名ゝゝ紀 定家

岫崎 奥津川と流りて薩埵山の海岸紀ふゝれ古の海道之仙覚抄万葉の註ふ
清見ヵ崎い今の岫崎ゝとゝ山道い岩石多ゝして高浪打よゝるゆ容易ふ
通り難ゝ事騎ゝ多ゝの道ゝくゝゆゝゝゝ人さゝふ流と顧るふ暇ゝ拙こそ親ゝゝゝ
子ゝゝゝの名ゝり紀後圓糸魚川の辺ふも此名あゝ同ゝく浪打ゝ紀所の中
道い明暦元年朝鮮の信使来ゝ時ゝゝ先ゝく南ゝゝ上道ゝゝ仕年
南ゝれゝく旅人の難紀助ゝく今の海道是ゝり 藤原資明



薩埵山

光行記

くれ寄といふあり荒磯乃岩ほ多く波ハ行あるいふ所風そげしくふ
おくは浪を望みるれどいとゞ志ほひのつゝひ道ゝ山きを拾ひて
まも宮社の志ゐくまでいかけくも思ひきり〜半びのをぞか〜ゝ
うちかゝ先ゑ生はいとかわて〜

わさ川風ふきわ〜後の岩ほこひ浪つけ衣ぬ〜〜と拾く　光行

実方

波の音くれゞ寄ようちまくめりこゝもまた人ゝ風のとまきに　堀川院中宮上総

新後撰

清足かゝ潟風寒紅よるみ〜いと寒も白ゝこゝ浪の関のり　覚大僧正典侍

藻塩中ゝ

波の罪ちとかゝ今ハ芦ふく岐賀潟とい所こいかゝ〜わけ道を通りゝに

志ほみちぬれぞゆゝ女ハ女のせほりく女波男波をかゝ〜て小浪よせる

附かゝひゝるゆゝふ浪の関ちとも浪の関戸ともやゝゝる

東應海道記

岫寄といふ所の風飆ゝと翻ひゝく砂波ハ〜波浪ゝと入ゝられて人と

しゝる行客ゝふ半ばゝさゝりて志ゐ〜〜くゝ〜せゝ浪ゝ波うかゞひてもつ紀

通る紀ゝゝも嶮岳の下と岩ほゝ志ほをしのぎ行右へ幽ゝる浪のうへ波

の浪先に眼うあぬへしたるくしと甚くはやふ大和田浦ふ来りて小船
れ沖中ふあるる船るる孤帆飛く万里風便をたのみて白煙ふ入鼇亀
波うあるくみ雲夕陽船あらひく紅藍をもむ海龍のうちふ此所
をのこそえく身船はそ先に

つたれどる波の面新たしひくまるるぶれ出てこの濱

此大和田浦ハ駿州志ふ云古へ菴崎と云ふ持船村小坂村の和りまくふ入
江の濱ありて大和田浦といふ後世うはられく陸地となりぬ今大和
田新田ありと云同名近江國栗太郡坂本ふあり栗太郡ハ志賀郡ふ
西成郡の内神崎と尼ヶ崎のあひだふ海ふ
古名大坂入津の船まつりふ海ふ
と後りと書しも非く万葉の大和田ハ大坂ふ
兵庫ふ十里ふ徳川氏今の大坂廻船の門ふ
ふ後しく大和田神崎江口ふ
してあ門とあるしも

豊臣秀吉公晩年より東征細師浦と称ハ又或ハ云細師浦ハ
細師浦風土記云烏帽子より東征江尾より横須賀まで船ハ
いふ細師浦ハ古依安
今の蔦堀山船ハふ右ふ
ありしお古依多し

万葉
磐城山直越來益礒嵜乃許奴美乃濱尓吾立將待
拾遺集
浜れるきいそ礒の濱の志ほ波はとまろ船はとまろ
夜半雨大
千載集
般石依山ふえく特ふ川る依時ふ
佐竹寺入乃
家集
山の名の岩本ふ長ふ波はとまろ月船はとまろ
源氏真
薩埵嶺
磐城山の峠ふ西の禁船洞村と
葛竜坂牛房坂山神平ふ
東の禁西倉沢ふ到る中古
漁夫の網ふ
ふ薩埵村あり
尊像船安置
坂女主坂
武彩峠
坂武惠坂
薩埵山の像山
薩埵山
東勝院の地蔵堂ふ
坂公経
坂公
坂公
坂公

絶壁女房を呼ん　恋の海　九種

拾れし嶺い絶壁ふ
雪船あるふ
松系みる絵ふ
鮑とる海士栄螺漁夫
寅の方ふ富士の高根白雪ふして時ふ
卯の方ふ愛鷹山巳の方ふ伊豆の岬酉の方ふ三保の
江海茫然うして
南ふ雲の波ふ
辺の蛍振ふ
初原の海

新たに雲と霧との中に消く浦の苫屋れ秋の夕ぐれふさ〻紙傷〜〜〜
波ふむれぬる小蟹みな〻れ聲をおく氷と見ゆる冬れ月ぎ〻いと寒〜〜
さ〻い垂り〜〜観應の比かとよ足利の杉〻ひ〻山ふ戦ふ直義れぬ〜〜利
ゐ〻して数十騎の兵紙一時ふ鏖〜れ討ふのりて三里のわ〻さか修羅
道の巷と〻り〻く叢腥く尸を路と埋こ〜〜と左平紀ふも署〜〜〜あれを
薩埵山の合戦とつふ其年小書〜〜〜櫻蛩も山縫さと四〻又小田原小泉と
甲斐の武田と爭ひ〜〜も山嶽〻り拓薩埵嶺れ崔嵬たるむ〜〜佐見ん
関れ要涯昭りと云伝へ〜〜も宜昭〻らん今い左平と凱へ聖代のまこと〻
干戈れ吉永く絶く礼楽と変〜〜貴と〻く緑や昭く足紙躊躇〜てあの
凡色紙賞〜〜歌よと詩つ〻りあ〻ふ行人も多〻ぐ〜〜と絶き〻〜れあ〻
名産栄螺鮑 鹿埵山 赤の蘇 西倉澤 山茶店 海鼠 崖小屋 遠〻り 小栄螺 鮑紙 料理〜〜 價〻ふ〻り 面 幽邃小
して三保の松原ふ〻ふ〻ふ〻く道中 冨士紙凡〻〻〻 双の系 色と 茶店の中 小望山嶽
高〜〜と〻ふ〻り遠近人交宮〜〜詩 詩の俳諧 あ〻ち〻 〻〻山亭 遺〻
歩〜〜〜〜〜〜〜の焼 如 出 紙 と汲〻 〻〻〻 鮑 拾ふ作 凡流ふ
〜〜〜〜〜〜〜

浅間山
東海
西倉沢
茶屋
新富士山
鮮
東海道第一の
風景あつぐ

富士川
琴後仕

富士川

駿陽
張安画

富士川 駿河 富士郡 駿河郡 日本紀 不盡河と書く
源は信州八ヶ嶽より流れ甲州に到る諸流合して大なる
末は海に注く道中者一の名流なり幅あり勝減あり一際限無し
水上船 船 船

見るとのゝしりあやぶく危うく乗り船中の人々目をひ魂乃清る絶へふる
往来停馬此蹈躅天下滔滔豈獨五湖陵慙慨一樵夫　羅山
河畔爲通名利路陪陵歳上松柏生蔭れもむすひ川の筋
水神森富士川右の山麓にあり岩本の下へ流れあるひは数多に支流と成て水神
けれ森の中に顔と彫りたる神の巖ふ築つけ流れの人は水難に難
八十年ふるり長堤とあり神の巖ふ築つけ流れの人は水難に難
水の時々此堤の内へ流水欲流へ
土人称〜〜袋堤といひ〜〜〜

親も討れよ子も討れよと死に狂ひ戦ひし西國の軍と申い憑て其儀いかゞ親討れぬまは引退紀伊半者共一旦落て寄子討る其然欲こそ寄作いかゞ兵粮米盡ねゝば妻子田作り秋の刈収先で寄せ夏の熱〳〵と厭ひ冬の寒〳〵と嫌ひ東國の軍い凡て其儀い作いかゞ其上甲斐信濃源氏等案内い知り富士川裾を搦め申や廻りいかゞ云ふ申せば大將軍此御心底賢き勢多〳〵と申せや思召れいらんを海でい作りかゞ個軍い勢に多少出より申さば大將軍此策ふよりとこそ申作いとゝ申れば是程聞兵若皆る恐き敷り去程ふ

同廿三日辰卯の刻富士川ゆく源氏の矢合と敵定りて二十三日辰巳ふ

八〳〵平家此兵ども源氏の陣と見渡せば伊豆駿河の人民百姓等ぐ軍ふ恐れて或い野ふ入り山ふ隠れ或い海ふ取乗り〳〵海にふ浮ひ或ぐ營れ火に見へる程あゝ

敷〳〵と源氏の陣に遠火の多さよ實ふ野も山も海もにふ武者ぐ有

りるいかゞせんと彼ぐ云れる其夜の夜半計富士の沼ふ群る水鳥

もが行ふ驚きたり〳〵一度ふどゝと立る羽音に雷大風の響との擬ふ聞へけ

れば平家の兵ども源氏の大勢の向ふたるい此る驚き別者ふ中はる強ふ甲斐

信濃の源氏等富士の裾ぢうり搦め人廻り惟らん歟行ず者ら有らん

取籠られて叶ふまじ爰とば落て尾張の洲俣に防げ申て取あもる

敢て我先ぎふ〳〵と落行る解りふ周章噪ぐ弓取者い矢とちゝ

番ら者い引とちゝ乗馬ふ人乗り人の馬ふい鞍置る馬ふ駿て馳

れい様に繋る事限り〳〵其名ご近き宿〳〵より遊君遊女ども集先

遊ひ酒盛〳〵名々或い頭に踏破られ或い後脚折られ〳〵鳴き叫ぶ事

駭〳〵 同廿四日辰卯の刻ふ源氏二十萬騎富士川ふ押寄て矢も響に

大地も壊ぐ計ふ鬨に成ぞ三箇度作り名る平家の方ふい定り立て言せ成人に成

入〳〵見ぞれば皆逃て作と申に或い故の亡れる鎧取て奉る者もあり或ハ

平家に捨て参たる大幕を引て帰る者もあり凡平家の陣ふい蜘さに翔り作

ぐ戸に兵衛佐殿ふ参る馬ふ乗甲に脱手水鶏鋼に成て王城の方に

ふじ川のごとく
富士川水鳥
とびたつをこのけのまぐんと
却て家大軍

将野絵師助藤原永俊画

伏籠とまれ全頼朝ゞ私の高名ふ非ず偏ふ八幡大菩薩の御討ひしとぞ宣ひ
々る聽〻ず取所なれば〻〻駿河國とは一條次郎忠頼遠江國とは安田
三郎義定ふ預らる猶も續く責べ〻り〻〻も後も流石覺束ふ〻〻
〻〻駿河國より鎌倉へ帰られ々る為首ふ

富士川の瀬々の岩こゞあるともまゝ為る伊勢平氏ゞ

丙辰 根國の御前ふて平家追討の事あり〻〻ふ平氏水鳥の羽音ふ驚て逃
去〻ハ富士沼の事ふて今ハ昔徳寺ハ所ゞ齊藤別當ゞ東國ふ搦兵
〻〻〻事ふ給ふ〻〻ふよりて平家ゞ兵ども臆病神のはまゝゝのぬくあり〻〻
御前ふ伺ひ〻る某沢御供ゞて辨士沢〻て敵の矢を防ぎ〻ひる事ふ為れ菩法ふ
いくらハ是ゝと伝せる事も呂今の猶ふ玉者耳ふ〻ぎりて覺へ伝る

闘國中分源與平東方氣勢盡豪英　羅山
何須禱八公山上竿是旌旗木是兵

曽我兄弟禿倉　富士川の東平直の北山際厚原といふ所ふあり土人曽我八
幡宮といふ今も敬討の名信ぜらふ盡應あるといふ甚側久沢寺ふ
猛泉寺といふあり〻〻ふ〻〻ふ〻〻の石塔あり苔古く文字刻為〻て〻〻〻〻寺
脚あり十郎祐成と高崇院厚峯巖良寿といひ文郎時宗沢鷹盃院厚士山

敵富士と見へ〻り沢勢〻沢と〻〻ふ郎の斬られ〻〻沢
首沢水首急ぎ取るとあり都建久八年五月廿八日和多秋兄弟富士の御
狩の旅鎧井出の屋形ふ推参し又の敬工為左衛門尉祐経沢討入給へ
直后の侍ふ十餘人を切ぎ三百八十餘人ふ沢負せ〻る祐成ハ仁田四郎
忠常ふ討れ時宗ふ五郎丸ふ生捕らる頼朝〻直ふ細沢安〻〻石
て寛仁の御志ありといくども祐経ふ頼ふ至申ふ終ふ縊
又ハ〻〻ふ虎御前の悲倉もあり祐成兄の成就兎の後出家して御沢
弔ひ〻〻〻〻空〻〻〻〻

小入道名義の有ん事をもとうとう我ら程の故と持参〻仰とて打解ぬかぞとの
被給仁と起されて分厚きうち行程の米四つぐさと云も果〻紀さぬ小松元ふたてる
左刀波元らんとすの所ど優〻さ故の振舞なりと修ふ弓ゆの肩より右まれ
脇の下板敷までも通れとさ我い切付られ人形も得さりや應と氣詞て
後の上ゆ波先上て更板敷切通〻下役まてぞ切入るも理なる源氏重
代の友切元行とのうたまるべきまりふはぐく所なり〻部切かさう預〻も是
ぞ〻〻志念佛へや時宗ろれとも人形三の四くさ左刀でもえ斬さうれ云云

古家川 吉原の西にあり和名抄に古家郷あり土人那〻海川とよぶ
富士川の支流にて屋敷〻古よりの歩行〻〻

三度橋 此蹴京大坂の三度橋なり朝鮮人来朝の時官家より橋を掛られし
甚頑固そなれとかるる故に度橋〻云ふ

儀間神社 高麗の山原〻和庄にあり延喜式内又三代實録授正二位初め富士山に
後後撰 四月廿日〻〻の社にて桜のさうり
新勅撰 ふ〻ひ〻ひ〻ろる花の形〻ひ〻て咲時ぞ〻ぬ山櫻〻る 法印隆弁
卓振神代の月はさえ石れ人みくと川もあ〻〻〻〻 平泰時

東海道名所圖會卷之四 畢

国立公文書館
National Archives of Japan